第4章 世界の複数性

01 われわれだけではない——NASA、ローエル、ウェルズ

一九九二年十月十二日、コロンブスによる新大陸「発見」から数えてちょうど五〇〇年目にあたるこの日、アメリカ航空宇宙局（NASA）は満を持して、もうひとつの大いなる「発見」のプロジェクトに着手した。その名も「コロンブス計画」と名づけられたこのプロジェクトは、高性能の電波望遠鏡を使い、数千の恒星系を対象にして、宇宙のはるか彼方に存在するやもしれぬ知的生命体から発せられた電波信号をキャッチしようとするもので、それ自体としては、通例SETI——地球外知性体探査(Search for Extra Terrestrial Intelligence)——と呼ばれる研究活動の一環であった。だが今回のそれは過去に例を見ない大規模な企てであり、アメリカはこのプロジェクトに向こう十年間で一億ドルの国家予算を投入することによって、五〇〇年前に「発見」された新大陸の地平から、今度は自分たちの手で「宇宙の新大陸」[1]を発見しようという壮大な決意を表明したのである。それは同時に、「宇宙にいるのはわれわれだけなのだろ

うか？　それとも、この宇宙のどこかに、われわれ人類以外の知的生命体が存在しているのだろうか？」という人類長年の問いに答えを出そうとする、現代科学の知の冒険でもあった。

話は、一九五九年にさかのぼる。現代科学としてのSETIの歴史は、この年の九月、コーネル大学のふたりの研究者が『ネイチャー』誌に発表した一編の論文によってはじまった。「恒星間通信の探索」と題されたその論文で、イタリアの核物理学者ジュゼッペ・ココーニとアメリカの天体物理学者フィリップ・モリソンは、①恒星間宇宙における通信媒体としてもっともすぐれているのは電波だから、高度に発達した文明をもつ地球外知性体（ETI）がわれわれに向かって信号を発しているとすれば、その手段はまちがいなく電波であること、②その電波はおそらく意図的な信号であることがすぐにわかる種類のものであるはずで、そのようなものとしてもっとも可能性が高いのは、電波天文学者ならだれでも知っているあの「水素の歌」、すなわち水素原子核のスピンが反転するときに生みだされる波長二十一センチ（周波数一四二〇メガヘルツ）のマイクロ波であること、を指摘したのである。

人びとは驚いた。とうの昔に疑似科学として葬り去られたと思っていた地球外知性体の探索が、一九五〇年代に高性能化した電波望遠鏡という武器を得て、ふたたび科学として甦ったのだ。しかも、受信対象となる電波の波長（周波数）がしぼり込まれたことで、地球外知性体――わかりやすく言えば〈知的な宇宙人〉――の存在をつきとめるという話も、にわかに現実味を帯びてきた……。

人びとは熱狂した。学会の、どちらかというと冷淡な反応を尻目に、マスコミに報道されたココーニとモリソンの説は異常ともいえるほど大きな反響を呼び、いちやく時の人となったふたりの研究者は、以後半年間にわたり、世界中のマスコミからコメントを求められつづけたという。それはあたかも、約半世紀ものあいだ抑圧されてきた〈知的な宇宙人〉への夢が、抑圧を解かれて一気にほとばしり出たかのような光景で

あった。だが、その熱狂的光景の背後には、長い空白の時間と、空白の時間を生む原因となった忌まわしい過去の経験が横たわっていた。SETIには、それが科学として甦るためにはなんとしても封印しなければならない、暗い前史があったのである。

話はさらに、十九世紀後半にまでさかのぼる。宇宙にはわれわれ人類以外にも知的生命体が存在しているという考えは、古代ギリシア以来——日本でも「かぐや姫」伝説以来——連綿とつづいているが、哲学的思惟や文学的想像力によるのではなく、科学的方法にもとづいて〈知的な宇宙人〉の存在をじっさいに確認しようという試みは、それを可能にする技術の進歩を待ってようやく実行にうつされることになった。いうまでもなく、望遠鏡製作技術の進歩である。十七世紀の初頭に発明された望遠鏡は、すぐこれを天体観測に応用したガリレオ（一五六四—一六四二）の時代に、すでにして太陽系の他の惑星の輪郭が地球とそっくりであることを明らかにし、そこに住む住人たちへの夢をはぐくむことに貢献していたが、その後もケプラー（一五七一—一六三〇）やニュートン（一六四二—一七二七）の手で多くの改良をくわえられ、十九世紀の後半にはついに、他の惑星の地表を詳細に観察しうるだけの精度を獲得するにいたったのである。折りしも一八七七年は、ほぼ十五年に一度おとずれる、火星の大接近の年にあたっていた。

この年、ミラノの天文台長ジョヴァンニ・スキャパレリ（一八三五—一九一〇）は、当時の技術の粋を集めて完成した口径二十二センチの大屈折望遠鏡をもちいて火星を観測し、その結果、この「赤い惑星」の表面には海のような黒い斑点がいくつもあること、その斑点と斑点をむすぶように奇妙な黒い線が網の目状に走っていることを発見した。スキャパレリはその黒い線に、イタリア語で「溝」ないし「筋」を意味する"canali"という名をつけたが、このなにげない命名が発端となって、以後、世紀転換期までの数十年間、火星人の存在をめぐる熱烈な論争が、より正確にいえば、火星人の存在を夢みる火星人フィーバーが、席巻す

ることになる。というのは、命名者においてはただ「溝」あるいは「筋」を意味しただけの"canali"（複数形）という言葉が、英語圏においていつしか――おそらくは火星人待望論者の意識的／無意識的誤読によって――「運河」を意味する"canals"へと変異し、この変異をばねにして、またたくまに火星の人工運河説という鬼子を生んでしまったからである。一八九〇年、フランスの天文学者カミーユ・フラマリオン（一八四二―一九二五）が火星の"canal"は人工物だと断言し、火星人フィーバーの火つけ役となったのが、その第一段階であった。

ただし、火星・人工運河説の誕生にさいしては、スキャパレリ自身の加担も（積極的にではないにせよ）あったようだ。一八七七年以降も火星観測を継続したスキャパレリは、数年後、最初観測したときには一本だった「溝」に平行してもう一本の「溝」があらたに刻まれている箇所を発見する。よく見ると、そのような例が二十以上も見つかった。慎重なスキャパレリは、それをもってみずからただちに人工運河説を唱えたわけではないが、報告を聞いた彼の同僚のひとりは、これこそは火星に知的生命体がいることの証しだと確信し、「火星の住人は大規模な土木工事を行っているに違いない」と、『タイムズ』紙に書いた[2]。

ちょうどそのころ、ひとりの男が長年の東洋旅行を終えてアメリカに帰ってきた。この男の登場によって、火星人フィーバーは決定的な段階につきすすみ、同時にその後ほぼ半世紀にわたる空白をSETIにもたらすことになる。この、SETIからすればA級戦犯的な人物こそは、パーシヴァル・ローエル（一八五五―一九一六）その人であった。

ローエルの前半生は、日本とも密接に結びついている。ボストンの名門の家系に生まれたローエルは、ハーヴァード大学を卒業後、一八八三年、鹿鳴館時代の幕あけとなる年に日本にやってくる。以後十年間、東京を拠点に活動し、ラフカディオ・ハーン、B・H・チェンバレン、E・D・モースといった明治のお雇

い外国人、あるいはまた、当時ボストン美術館の日本美術品収集に携わっていたW・S・ビゲロー、フェノロサらと交流しながら、日本および極東の文化を観察した。その成果は『朝鮮』（一八八六）、『極東の魂』（一八八八）、『能登』（一八九一）、『オカルト・ジャパン』（一八九五）等の著作に結実しているが、それらはただたんに異国の珍しい風俗を紹介するのではなく、「日本人の思想・思考形式の研究」という高度に抽象的なレヴェルにまで達していたという[3]。

すぐれた「ジャパノロジスト」ローエルはしかし、一八九三年に帰国してのち、『オカルト・ジャパン』を最後に日本研究を捨て、その後半生は火星観測にのめりこむ。学生時代には数学で頭角をあらわし、指導教授から数学者になることをすすめられたというから、もともと多才な人物だったのだろう。一八九〇年に発表されたフラマリオンの火星・人工運河説に興味をもった矢先、のちに彼が自著『火星とその運河』（一九〇六）において尊敬をこめて「惑星世界のコロンブス」と呼ぶことになるスキャパレリが視力の衰えのため火星観測を断念したと聞き、スキャパレリの仕事を引き継ぐべく、火星研究への転身を決意する。裕福で、奇矯な人物でもあったのだろう。一八九四年にはアリゾナ州の高度二二〇〇メートルの地に私財を投じてローエル天文台を設立し、そこに、スキャパレリのものをはるかにしのぐ口径六十センチの高性能屈折望遠鏡を設置した。以後、憑かれたように火星をのぞきつづけるが、その結果、あろうことか、だれの目にもしかとは見えない人工の運河が見えてしまった。見えてしまった以上、高度な文明をもつ火星人の存在を彼が信じたとしても、不思議ではない。一八九五年の『火星』を皮切りに、彼はみずからの信念を著書のかたちでつぎつぎと世に問うこととなる。ローエルによれば、

火星は地球より小さく、惑星の環境進化も地球より早く進行した結果、星全体の乾燥化・寒冷化のプ

ロセスも進み、現在の平均気温は摂氏八度前後と推定される。高度の技術文明を築いた火星人たちは、悪化する環境の中でその文明を維持するために、極地に極冠となって残った水を低緯度地帯へ導く巨大な運河のネットワークを張りめぐらした。われわれが地球から見ているものは、運河そのものではなく、運河の左右に広がる農場地帯の植物であり、その証拠に、季節によって運河の幅が増減するのが見える。惑星全土にわたってこれだけ巨大で統一的な土木工事を行えるほどだから、火星人たちはとっくの昔に地球のような国家レベル、民族レベルの対立を解消し、平和で安定した理想社会を築いているに違いない……。[4]

このような見解がおおかたの天文学者の賛同を得たわけでは、もちろんない。ローエルの主張には、あまりにも多くの夢想と、あまりにも大胆な論理の飛躍がふくまれていた。おおぜいの研究者がローエルに反論したが、そうした専門家の反論など、ローエルに熱狂する圧倒的多数の大衆の前にはものの数ではなかった。大衆はローエルを断固支持し、彼の本は飛ぶように売れた。ローエルの言うことは、なによりも、わかりやすかった。たしかに火星には地球とおなじような極冠が見えたし、季節の推移によって表面の様子に変化が生じるのも観察できた。そこから、観察された火星表面の変化は植物あるいは農作物の生長にともなうものであり、農場地帯に水を引くために、極地の雪解け水を赤道近くまで導く「巨大な運河のネットワーク」が張りめぐらされたのだと考えるのは、すくなくともひとつのお話としては、筋道が立っていた。だからであろう、ローエルの本はよく売れた[5]。

よく売れたのはしかし、ただわかりやすかったから、というだけの理由からではないだろう。大衆がローエルの本に熱狂したのは、なによりもそこに、長い歴史の中ではぐくまれてきた人類の夢が記されていたか

らではなかったか。しかも、はじめて科学の装いをして。「この宇宙にいるのは、われわれだけではない」というメッセージを、人びとはローエルの通俗科学書のなかに読みとった。ほんとうに火星に人工の運河が観測できるのかという専門家たちの論争など、じつのところどうでもよかった。というか、読者はローエルが見たという人工運河の存在を自明の事実として受けいれたうえで、その運河を建設したはずの火星人の存在を、ローエルとともに、いわば集団的白昼夢として夢みていたにちがいない。

十九世紀後半にはじまった科学的手法にもとづくETI（地球外知性体）の探索は、当時の最新技術の結晶である大屈折望遠鏡の完成によってその第一歩を踏みだしたのもつかのま、ローエルの登場によって、こうして世紀転換期には、科学のフィールドから疑似科学のフィールドへと大きく逸れていく。それだけではない。社会現象にまでなったこの逸脱を背景に、さらに文学のフィールドにまで飛び火して、ETIによる地球侵略という、SFのあらたなテーマを生みだしもするのである。

一八九七年に雑誌に発表され、翌年公刊されたH・G・ウェルズ（一八六六―一九四六）の『宇宙戦争』（原題は"The War of the Worlds"すなわち「世界間戦争」）は、火星人の地球侵略をテーマにした小説である。火星に知的生命体が存在しないことがあきらかになった現在から見ると、荒唐無稽な設定としかいいようがないかもしれないが、しかし、十九世紀末の読者にとって、このテーマはかならずしも完全に非現実的なものではなかった。それどころかウェルズは、当時熱狂的に受けいれられていたローエルの疑似科学にもとづいて、この小説を書いたのである。地球への侵略を決意するにいたる火星人の置かれた状況について、ウェルズはこう書いている。

いつかはわれわれの惑星を襲うにちがいない永遠の冷却が、われわれのとなりの惑星では実際すでに

はるかに進行している。その物理的条件は、いまなお大部分謎であるが、われわれはいまでは、火星の赤道地帯でさえ、正午の温度がわれわれのいちばん寒い冬の温度にも達しないことを知っている。[……] 海洋は地表の三分の一を占めるにすぎないまでに収縮し、季節の変化が緩慢なので、その双方の極に大きな雪冠ができたり溶けたりして、周期的に温帯地域に洪水を起こしている。そういった衰亡の最後の段階は、われわれにとってはまだ、とほうもなく遠い将来のことであるが、火星の住民にとっては現在の問題となっている。目前の必要という直接の圧力は、火星人の知性をみがき、その能力を増大し、その心情を冷酷にした。そして、われわれが夢にも思いおよばなかった器械と知能をもって宇宙空間をながめわたし、太陽の方角にわずか三千五百万マイルをへだてた至近距離に、生い茂る植物の緑と、水の灰色と、肥沃を雄弁に物語る曇りを帯びた大気と漂うちぎれ雲のあいだをすかして、生物が密生する広々とした土地と、それにはさまれた船舶の群がる海がかいま見える、希望の明けの明星、われわれ自身のいっそう温暖な惑星を発見した。[6]

温暖で緑ゆたかな地球にたいする、乾燥化と寒冷化（平均気温は摂氏八度前後）の進行した火星という対比にもとづき、それゆえ火星人は、極地の雪解け水を農業用水として低緯度地帯へ導くべく、その高度に発達した文明の力で巨大な運河のネットワークを張りめぐらしたとする、先に引用したローエルの説が、この小説の下敷きになっていることはあきらかだろう。ただし、惑星全土にわたって巨大で統一的な土木工事をおこなえることを根拠に、火星人は国家間・民族間の対立をすでに解消し、「平和で安定した理想社会」を築いていると推測したローエルとは異なり、ウェルズのペシミズムは、環境悪化が限界に達し、もはやみずからの惑星に住めなくなった火星人が、あらたな生存の地をもとめて地球に来襲するという、別のシナ

リオを書かせたのではあるけれど。

ローエルの『火星』とウェルズの『宇宙戦争』があいついでベストセラーになったこの世紀末が、火星人フィーバーの絶頂期であった。疑似科学とSFがむすびついて異常発酵させたその熱も、だがやがて、厳密な科学の手でふたたび冷まされることになる。二十世紀に入ってもなおローエルは、『火星とその運河』（一九〇六）、『生命の住処（すみか）としての火星』（一九〇八）という二冊の著書でみずからの信念を主張しつづけていたが、一九〇九年、フランスの天文学者ユージェンヌ・アントニアディは、最新にして最高性能の望遠鏡を駆使して火星を観測した結果、次のように断定して、火星の人工運河説をめぐる長年の論争に決着をつけたのである。「スキャパレリの運河は決して事実無根ではないが、実際には運河でもなければ一本とか二本の直線でさえない。より高性能の望遠鏡でより精密な観測をするとそれらは、これまで考えられていたものとは大きく異なり、限りなく不規則でまったくの自然現象である」[7]。

その後も余熱のようなものはあった。あらたに開発された無線通信技術を使って火星人と交信しようとする、科学の側の最後の試みもあった。だが、火星にはどうやら知的生命体など存在しないようだという認識が一九〇九年を境に徐々に一般のあいだに広がっていくにつれ、人びとの火星への関心は急速にさめていき、一九二〇年代以降には、ETIの探索が科学の衣装をまとっておこなわれることは、わずかな例外をのぞいてほとんどなくなった。そのわずかな例外にしても、それが一般の興味をひくことはもはやなかった。人類の〈知的な宇宙人〉への夢は、あまりにも散文的な現実の前に、ほぼ完全に消失したかのように思われた。

それがじつは消失したのではなく、存在したかもしれぬ〈知的な宇宙人〉への夢が裏切られたことにたいする一種の反動形成であったことを示唆する事件が、一九三八年にアメリカで起こる。この年の十月三十日、ハロウィン前夜の午後八時、アメリカのCBSラジオがH・G・ウェルズの『宇宙戦争』をラジオドラマ化

した『火星人襲来』なる番組を放送した。ドラマ化したのは奇しくも原作者とおなじ姓をもつオーソン・ウェルズ（一九一五―一九八五）、その過激な才能をいちやくアメリカ中に知らしめることになる事実上のデビュー作であった。

ラジオドラマ『火星人襲来』は、その冒頭、CBSの（通常の装いをした）音楽番組が突然中断し、火星での異変を告げる臨時ニュースが流れるという破格の形式でもってはじまる。その後も、再開された音楽番組が何度も臨時ニュース――じつはニュースの形式をとったドラマ番組――によって中断され、時々刻々、ニュージャージー州の農場に「巨大な閃光を放つ物体」が落下したこと、円筒形のその物体（ロケット）のなかから奇怪な生物が這いだしてきて熱光線での攻撃を開始したこと、それが地球を侵略にきた火星人であり、かれらはいま軍の反撃をけちらしながら破竹の勢いでニューヨークに向かいつつあることなどが告げられた。その結果、驚くべきことに、放送を聞いていた百万人以上のアメリカ国民が、これをほんとうの臨時ニュースだと思いこんでパニックに陥ったのである[8]。

このパニック事件は、当時（一九四〇年）社会心理学者キャントリルによって、ナチス・ドイツによる戦争の脅威およびユダヤ人の迫害に不安を募らせていた、第二次世界大戦前夜のアメリカ人の心理と関連づけて語られもしたが[9]、ETI探査史の文脈では、「人々の夢の中に生きつづけてきた火星人が、もはや永久に過去のものとなろうとする最後の刹那」の「ほんの一瞬の光芒を放つ出来事」と見なされている[10]。たしかにこの事件以後、火星人の話題が世間を騒がせることはなかった。その意味で、これが世紀末に頂点を迎えた火星人フィーバーの最後の名残だった、というのはまちがいではない。しかし、人工運河をめぐる論争に終止符が打たれて三十年近くも経過した一九三八年のこの時点で、パニックを起こしたアメリカ人のほとんどは、火星人などどこにも存在しないことを、すでに知識としては知っていたはずである[11]。それが

突然――オーソン・ウェルズの演出と演技がいかに巧みだったとしても――たかが一本のラジオドラマを聞いただけで百万人単位の人びとが火星人の襲来を現実の出来事として信じてしまう、などということがどうして起こりえたのか。

ラジオドラマを聞く聴取者の側に、無意識のうちに火星人の来襲を期待する心理があったからではないだろうか。「火星人の来襲を期待する」という言い方が強すぎれば、火星人あるいはETIの存在を期待する心理、と言ってもよい。世紀転換期にローエルの火星・人工運河説、火星・高度文明説が熱狂的に受けいれられたとき、それを支持した大衆の胸のうちには、「宇宙にいるのはわれわれだけなのだろうか?」という問いにたいする答えとしての「われわれだけではない」という、熱い思いがあったはずである。それに付随して、もしもほんとうにETIの存在が確認されれば、それが人類にとって科学史的にも精神史的にも「コペルニクス的転回」をはるかにしのぐ大事件となるにちがいない、自分たちはその世界史的大事件に立ちあっているのだ、という緊迫した思いもまた。人びとは火星人と接触する日の訪れをかたずをのんで待ちうけた。けれども、いつまでたってもそのような日は訪れなかった。訪れないどころか、あれほど熱狂したローエルの説自体が、ある日精密科学の手で否定されてしまう。一度かきたてられた火星人への熱い思いは、それによって憧憬の対象を喪失し、行き場を失った思いは反転して、かつて熱い思いをいだいたという事実それ自体を抹殺しようとする。こうして一種の反動形成がおこなわれ、ETIへの夢は抑圧されるが、抑圧された夢はけっして消滅したのではなく、意識の昏い淵で眠りつづけていた……。

そのように考えれば、一九三八年の火星人襲来パニックは、ローエルの疑似科学に翻弄されたあと一見ほぼ完全に消失したかに見えたETIへの夢が、理性の間隙をつく不意撃ちをくらって、意識の昏い淵から突発的に噴出したものと見なすことができるだろう。だとすれば、これを最後にふたたび意識下にもぐった

ＥＴＩへの夢は、条件さえととのえば、いつかまた、熱狂をともなう熱い思いとして甦るにちがいない。つまり、このパニック事件は、ＳＥＴＩ前史の「最後の刹那」に放たれた「ほんの一瞬の光芒」として位置づけられるだけでなく、いつの日か現代科学としてのＳＥＴＩが登場する、その予兆としてとらえることもできるのである。

はたして、その二十一年後、火星の人工運河説を最終的に葬ったアントニアディの研究から数えればちょうど五十年後の一九五九年に、ココーニとモリソンの論文「恒星間通信の探索」が『ネイチャー』誌に発表されたのだった。この論文によってふたりがマスコミの寵児となり、半世紀ものあいだ抑圧されてきたＥＴＩへの夢が抑圧を解かれて一気にほとばしり出たかのような光景を現出させたことは、すでに述べた。五十年という歳月は、人びとの記憶を風化させるのに十分な時間なのだろう。人びとは、忌まわしい過去など存在しなかったかのように、無邪気にもふたたび〈知的な宇宙人〉への夢に酔った。

さて、ＳＥＴＩのその後である。現代科学としてあらたな装いのもとに甦ったＳＥＴＩは、今度は着実に、とはつまり疑似科学へと逸脱することなく、その歩みを進めていく。二十世紀後半というこの時代も、ＵＦＯの飛来とか宇宙人の死体の隠匿といった怪しげな撹乱情報にはこと欠かなかったが、第二のローエルはあらわれず、代わりに若き電波天文学者フランク・ドレイク（一九三〇―）が登場することによって、ＳＥＴＩは一挙に実証科学の階段をかけのぼっていくのである。

当時アメリカ国立電波天文台にいたドレイクは、まずはじめに、ココーニとモリソンの提案した波長二十一センチ（周波数一四二〇メガヘルツ）のマイクロ波をじっさいに受信する計画を立て、それをライマン・Ｆ・ボームの『オズの魔法使い』にちなんで「オズマ計画」と名づけた。十光年以上も彼方のふたつの恒星にむけて巨大な電波望遠鏡をかまえ、恒星からの電波をキャッチするというこの計画は、一九五〇年代の末

に立案され、一九六〇年には実行に移されたが、二か月にわたって計四百時間の受信実験をつづけたあげく、失敗に終わる。しかし、SETIが具体的に始動したことの意義は大きく、以後ドレイクはつねにSETIの中心にいて、研究をリードしていくことになる。一九六一年には、世界ではじめてのSETIシンポジウムが開催され、ETIの存在可能性をもとめる「ドレイク方程式」が発表された。一九七一年には「サイクロプス計画」が、NASAとスタンフォード大学の共同研究として実施され、ETIと交信するための理想的システムを（机上で）設計した。SETI研究のこうした一連の流れを最終的に統合するのが、本章のはじめに述べた一九九二年の「コロンブス計画」なのである。

しかし、SETIは万事順調に進んできたわけではない。科学者のなかにもETIの存在を疑問視する者はおおぜいいて、かれらはSETI研究の継続自体に反対している。反対陣営の論拠としてもっとも有名なのは「フェルミのパラドックス」であろう。これは、まだSETIが現代科学として始動する以前の話であるが、物理学者エンリコ・フェルミ（一九〇一―一九五四）は次のようなシンプルな考えを表明して、ETIの存在を主張する陣営に水をさした。フェルミによれば、この広大な宇宙にETIがいないとは考えがたい。しかし、もしETIがいるのなら、かれらはすでにわれわれの前に姿をあらわしているはずだ。「それで、かれらはどこにいるんだ？」（Where is everybody?）

実証科学としての事実の提示をもとめるこの「フェルミのパラドックス」にはじまり、ETIの存在をめぐってはこれまでさまざまな論争が起こり、現在まで最終的決着を見ていない。ETIの問題にかんして、科学者たちのあいだにこのような意見の相違が生じるのは、カール・S・グートケによれば、それが純粋に実証科学だけの問題ではなく、すぐれて哲学的問題、それも「宇宙論的想像力」（die kosmische Imagination）をともなう哲学的問題だからである。ETIの問題と取りくむ科学者は、そのとき純粋科学の現場から、自分

自身の「想像力」の場に差しもどされるのだ。

この種の科学者は、フレッド・ホイルのように、サイエンス・フィクションを書くだろう。あるいは、カール・セーガンのように、みずからの銀河系哲学を通俗科学書でひろく一般に伝えたり、その科学的研究がはらむ定式化できないモティーフを形容詞、ないしは接続法でほのめかそうとするだろう——いずれにせよ、科学者もまた、いまや不可欠のものとなった哲学的想像力の冒険に立ちあっているのである。[12]

「接続法で（in einem Konjunktiv）ほのめかそうとする」——ムージルの可能性感覚をただちに想起させるこの言葉は、ETIの問題を考えるためには、ムージル的思考とも交差する「哲学的想像力」が必要とされることを語っている。同時にそれが、「サイエンス・フィクション」に通じるような文学的想像力と無縁ではないことも。じじつ、そのような哲学的ないし文学的想像力は、これまで述べてきた科学的ETI探査の歴史をはるかに越える時空の広がりを、人類の精神史のうえに刻んでいる。科学的方法にもとづくETI探査が十九世紀後半のヨーロッパに始まり、疑似科学へと逸脱していった前史をふくめてもまだ百数十年の歴史しかもたないのにたいし、〈知的な宇宙人〉に向けられた哲学的思惟と文学的想像力は、古代ギリシアにまでさかのぼる二千数百年の歴史を有しているのである。現代のSETIへとつながっていく〈知的な宇宙人〉への夢の系譜を、では次に、西洋の精神史の視点から振りかえってみよう。

02—世界の複数性（古代）——エピクロス、ルクレティウス、ルキアノス

「宇宙にいるのはわれわれだけなのだろうか？」——この問いを、人類はいつごろからはぐくんできたのだろう。「宇宙世界は数的に無限である」と想定したミレトスのアナクシマンドロス（前六一〇頃—五四〇頃）にその起源をもとめる人もいれば、その弟子アナクシメネス（前五四六頃盛年）こそが世界が複数存在することをはじめて主張した、という人もいる。ある論者によれば、紀元前六世紀後半に成立したピュタゴラス派によって、月および星辰に人間と同種の生物が棲息していることがいちはやく明言されているし、また、ミレトスのレウキッポス（前四八〇頃—？）が創始し、アブデラのデモクリトス（前四二〇頃—？）によって確立された原子論に、世界複数説の、精神史的に見てもっとも重要な基礎づけを見いだす論者もいる。このように、起源についての見解には諸説あるけれども、世界の複数性を説いた古代ギリシアの重要なテクストとして、どの論者もほぼ共通して取りあげているのは、ディオゲネス・ラエルティオス（三世紀前半頃）の『ギリシア哲学者列伝』によって今に伝えられる、次のようなエピクロス（前三四一頃—二七〇）の言葉である。

> 世界は限りなく多くあり、その或るものは、われわれのこの世界と類似しているが、他のものは、類似していない。なぜなら、［……］原子の数は限りなく多くあり、それは、きわめて遠いかなたへでも運動してゆくからである。じつのところ、世界がそれから生じそれによってつくられうるようなそう

いう原子は、一つの世界なり、あるいは、限られた数の世界なりをつくるために使い尽くされたこともないし、また、互に類似しているかぎりの世界なり、あるいは、それとは類似していないかぎりの世界なりをつくるために使い尽くされたこともないのである。したがって、世界が限りなく多くあることの妨げとなるものは、全く存しないのである。[13]

これらもろもろの世界が、必然的に、ただ一つの形状をもって生成したのではないと信ずべきであり、しかしまた、任意にどんな形状でもとって、生成したのでもない、と信ずべきである。さらにまた、あのすべての世界にも動物や植物やその他われわれの世界で観察されるとおりのあらゆるものがある、と信ずべきである。というのは、動物や植物やその他われわれの世界で観察されるあらゆるものの出来るもとになるような種子が、或る世界には、包み込まれることも包み込まれないこともありえたが、他の世界には、ぜんぜん包み込まれえなかったであろう、というようなことを、なんぴとも論証しえないであろうから。[14]

いずれも弟子ヘロドトス――ただし、あの歴史家ヘロドトス（前四八四頃―四二五頃）ではない――に宛てた手紙からの引用であるが、はじめに引用した部分からは、エピクロスがレウキッポスとデモクリトスによって築かれた原子論に依拠して、世界の複数性を語っていることがわかる。レウキッポスとデモクリトスの原子論によれば、万物の構成要素は原子（アトム）である。原子はそれ以上分割できない微小な物体で、無数に存在するが、この無数の原子が広大な虚空へと運ばれて渦をつくり、そこで互いに衝突しあって離合集散をくりかえすことで、その集積物としての万物を生みだすのである。弟子ヘロドトスに向かっていま「世界

が限りなく多くある」ことを説こうとするエピクロスは、ここでその根拠として、あきらかにこの原子論の考えに立脚しつつ、「原子の数」が限りなく多くあることを挙げている。そして、われわれの存在するこの世界が原子から成り立っているのであれば、無尽蔵にあるそのおなじ原子が「遠いかなた」へ運動していき、そこに次々とわれわれとは別の世界を造らないはずがない、というのである。

つぎに引用した部分では、そうして造られた別の世界がわれわれの世界と基本的に同質のものであることが説かれる。ここでもその根拠として挙げられているのは、無数に存在する別の世界とわれわれの世界を構成する要素が同一のものであるという考えであるが、ただし、その構成要素が今度は「原子」ではなく、「種子」と呼ばれていることに注意しよう。この言葉はただちに、アナクサゴラス（前五〇〇頃—四二八頃）の「種子」（スペルマ）を思いおこさせる。アナクシメネスの弟子であったアナクサゴラスは「あらゆるもののうちに、あらゆるものの部分がある」とし、その「あらゆるものの部分」である無限に微小な存在を種子と呼んだ。というと、原子とほぼおなじ概念のように思えるし、じじつ、レウキッポスはアナクサゴラスの種子の考えを発展させて原子論を生みだしたと言われてもいるが、種子の場合、原子とおなじく無数に存在してはいるけれども、数だけではなくその種類においても無限であるとされている点に質的な差異が認められる。

さらに一説によれば、この種子は生命の種子として宇宙空間をただよい、たどりついた先で発芽して動植物を発生させるという。これは二十世紀初頭にスウェーデンの化学者スヴァンテ・アレニウスが仮説として立てた「胚珠広布説」につながる考え方であり、もしも地球にそのような形で生命が発生したとすれば、他の惑星でおなじようにして生命が発生したとしてもおかしくはないという意味で、地球外生命体ないしETIの存在を支持する有力な根拠になりうるものである。エピクロスはこの点についてくわしく語ってはいな

いが、そもそもレウキッポスの原子論がアナクサゴラスの種子をもとにして構想されたものであり、また伝えられるように、デモクリトスもレウキッポスの弟子であると同時にアナクサゴラスの弟子でもあったとすれば、エピクロスが原子論とともにアナクサゴラスの種子にまつわる考えを受容していたとしても不思議ではないだろう。右にしめした第二の引用においても、すくなくともエピクロスは、「われわれの世界」すなわち地球で動物や植物を発生させたのとおなじ種子が、「他の世界」で動物や植物を発生させないはずがなかろうという考えは明示している。

世界を形成する原子が無数に存在する以上、われわれの世界とは別の世界が無数に存在するだろうし、そこにはわれわれの世界とおなじような生物が棲息しているだろう――エピクロスのこの考えは、宇宙物理学者ポール・デイヴィズによれば、現代のＳＥＴＩを動かしている思考の中核にあるものと本質的におなじものだという。つまり、「物質が豊富にあって、自然界が一様（どこでも同じ）ならば、地球と太陽系を作りあげたのとまったく同じ物理過程が、どこか別の場所でも起こっているはずであり、さらに適切な条件が満たされるならば、生命と意識もほぼ地球と同じように出現するはずだ」というのである[15]。エピクロスだけではない。すでに名前をあげたアナクシマンドロス、アナクシメネス、ピュタゴラス、アナクサゴラス、レウキッポス、デモクリトスといった古代ギリシアの哲学者たち、およびその周辺にいた人びとにとって――いっぽうでプラトン（前四二八／四二七―三四八／三四七）とアリストテレス（前三八四―三二二）という、この世界以外の世界の存在を認めなかった巨大な対立者はいたにせよ――地球外生命体の問題は、現代とおなじく「日頃おなじみのテーマ」[16]だったのだ。

ミレトス学派のアナクシマンドロスあたりに発したとおぼしき、世界の複数性をめぐる古代ギリシアの哲学的思惟は、その弟子アナクシメネスからアナクサゴラスへ、アナクサゴラスからレウキッポスとデモクリ

トスへと受け継がれ、大筋としてはしだいに古代原子論の流れを形成しつつ、最終的にエピクロスに集約されていく。つづく古代ローマにおいては、そのエピクロスを神のごとく崇めるひとりの詩人が登場し、伝えられた古代原子論の思想を一編の壮大な哲学叙事詩にうたいあげた。ルクレティウス（前九九頃―五五頃）の『事物の本性について』である。その第二巻末尾において、ルクレティウスは宇宙の成りたちと有りようについて、次のように語っている（一〇四八―一〇七六行）。

まず始めにいうことは、いたるところでどの方向にも
また両側にも、上にも下にも、全宇宙にわたって一つの
限界もないことである、それは先に私が教え真実自身が
声高く叫び、深い虚空の本性が明らかにしているところである。
それゆえに、あらゆる方向に空虚な空間がひろがり
数しれぬ元素が深遠な空虚の全体の中を
永遠につづく運動にかりたてられ、多数の仕方で
とびまわっていながら、ただこの一つの大地と天空だけを作り、
その外にはかの大量の元素は何ごとをもなしてはいないとは
まったくありそうにも思えないことである。
ましてこの世界は自然によって作られたものなのだから。
すなわち、ものの種子自身が、自発的に、様々な仕方で、
あてもなく、むなしく、効果もなくぶつかり

そしてついに思いがけなく結合しては
ずっと、大きなもの、大地、海、空、
動物の種族の始めとなったのだから。それゆえに繰り返しいうが、
アイテールが嫉妬深く抱いている
この世界と似た、物質の集合がどこかよそにも
また必ずあることを認めなければならない。

さらにまた物質は数多く用意されてあり、空間もその場にあり、
何ものも、いかなる原因もさまたげないのだから
きっと事は行われなしとげられるにちがいない。
それで、もし種子が無数に、生きとし生けるものが
生涯かかってもかぞえきれないだけあり
この世界で物の種子を結合させた同一の力と
自然とが存在して、同じようにして、
いたるところで種子を結合させることができるなら
宇宙の他の場所において、他にも大地があり
様々な人類、獣の種族があると認めなくてはならない。[17]

断片的にしか伝えられていない、古代ギリシアにおける世界複数説の、これは雄渾な文学的復原であると

言えるだろう。ルクレティウスの文学的特質について、藤澤令夫は「詩人の深い感情と情熱によって教説は生気をふきこまれ、その生気はあり余るほどの比喩やイメージを呼び、抽象的な議論は現実の世界での経験的事実によって、具体的に生き生きと例証される」[18]と述べている。右の引用は七千数百行におよぶ哲学叙事詩のごく一部を切りとったものにすぎないが、このわずか二十九行の詩行からだけでも、その特質の一端は――すぐれた翻訳を通して――感受できるだろう。ひとりの哲学詩人ルクレティウスを得ることによって、エピクロスは、みずからの思想の後継者のみならず、そのみごとな表現者をも同時に獲得したのである。

ルクレティウスの『事物の本性について』が世界の複数性をめぐる古代ギリシアの哲学的思惟の文学的復原だったとすれば、おなじテーマをめぐって語られながら、そのような哲学的思惟とはまったく異なるレヴェルで表出された純粋に文学的なテクストも、帝政ローマの時代には出現した。シリアはサモサタ生まれのギリシア系の作家ルキアノス（一二〇頃―一八〇以降）の手になる『本当の話』（一七〇頃）である。

その第一巻冒頭で、ルキアノスは言う。ホメロスのオデュッセウスをはじめとして、これまで旅行記の形式をとっていくつもの法螺（ほら）話が語られてきた。そのこと自体をとやかく言うつもりもないし、かくいうわたしも同じ穴のむじなのだが、およそありそうにもないことをいかにも本当らしく語ってきたこれまでの詩人や歴史家や哲学者とはちがい、わたしルキアノスはひとつだけ本当のことを申しあげておく。それは、わたしの言うことは嘘だ、ということだ。これからわたしが語ることはすべて、「自分で見たことでもなければ、人から聞いたことでもない。いやそれどころか、そもそも存在してもいなければ、けっして存在するはずのないことでもあるのだ。なぜといって、それは――一言でいえば――金輪際ありえないことだからである」[19]。

ずいぶんと人をくった話ではないか。「本当の話」と題された旅行譚の冒頭で、語り手がわざわざ、これ

は「金輪際ありえない」（ヴィーラントの独訳では„gar nicht möglich sind"）ことを語った話だと言う。しかも、その本当の話ではないということだけが、いまからお話しする『本当の話』で本当のことだ、というのである。ルキアノスのパロディー精神がいかんなく発揮された語り口ではある。だが、ホメロスの時代はともかくとして、大航海時代の幕あけとともにおびただしく涌出した、近代の架空旅行記のことを思いだしてみよう。トマス・モア（『ユートピア』一五一六）にしろ、ドニ・ヴェラス（『セヴァランブ物語』一六七七―七九）にしろ、シュナーベル（『フェルゼンブルク島』一七三一―四三）にしろ、それら架空旅行記の作者たちは、みずから構想した島ユートピアの実在性を保証するために、多くの場合その序文にあたる部分で、委曲をつくして（架空）旅行記の真実性をうったえていた。それに比べてルキアノスのこの前口上は、なんという天衣無縫ぶりであることか。

もっとも、ルキアノスの場合、大航海時代以降の作者たちとちがって、真実らしさをよそおう必要はなかった。稀代の諷刺家ではあったが、その諷刺は、鋭い政治性をおびてユートピア的理想国家をめぐる言説にむかったわけではなく、したがって、政治的批判精神のゆえに時の権力に弾圧される怖れは、まずほとんどなかったからである。その代わりに、ルキアノスの諷刺の矛先は現実世界の人間の愚かさに向けられた。諷刺は諧謔の刺となってありとあらゆるものを――とりわけ詩人と哲学者を――笑いのめし、その哄笑によって自由奔放な想像力の噴出をうながした。たとえば、こんな具合に……。

『本当の話』第一巻において、大西洋の果てに何があるかを見きわめるべく船に乗りこんだルキアノスは、航海中つむじ風に巻きあげられて船ごと月に運ばれる。月では折りしも月軍と太陽軍の戦争のまっ最中で、ルキアノスの一行も月軍に加勢して戦闘にくわわるのだが、その軍勢たるや両軍とも、象十二頭分もある巨大な蚤にまたがった部隊や、羽もないのに空中を飛ぶ歩兵隊、さらには犬の顔をした有翼の団栗隊などから

成りたっている奇怪なものだった。戦争は、月と太陽のあいだの空中に城壁を築いて太陽光線を遮断し、月世界を闇で閉ざす作戦にでた太陽軍の勝利に終わり、ルキアノスの一行も地球に帰還するが、ようやく地球に帰ってきたのもつかの間、今度は巨大な鯨の体内にやはり船ごと呑みこまれる。鯨の体内もまた、陸があり樹木が茂る別世界だった。そこには先住民の人間以外に、鰻の目と川海老の顔をした種族やら、上半身が人間で下半身がいたちの種族やらが棲息していたが、ルキアノスは異種族との戦争に勝利して鯨の体内から脱出する。ふたたび海にもどったルキアノスは、つづく第二巻では「至福の島」(Insel der Seligen) にたどり着く。そこはギリシアの半神や英雄たち、哲学者や詩人たちが、死後、魂となって暮らしている島であるが、あらゆる種類の花が咲きみだれる常春のこの国で、死者たちは年をとることもなく永遠の幸福を享受している。町はずれにある、かのエリジウムの園では、快楽主義者のアリスティッポスとエピクロスを中心に愉悦の宴がひらかれているけれども、そこにしかつめらしい哲学者の姿は見あたらない。プラトンは自分で作った理想国家で自分の考えた国制や法律に埋もれて暮らしているし、ストア派の連中はあいもかわらず険しい「道徳の山」(Tugendhügel) を登っていて、饗宴どころではないからだ……。

このように、ルキアノスの旅行譚は、あらかじめその虚構性をことわるまでもないような荒唐無稽な話に終始する。『フェルゼンブルク島』の序文において、シュナーベルはことさらに彼の名を挙げ、自分の話を「ルキアノスふうのばか話」(Lucianische Spaas-Streiche) [20] と同一視しないよう読者にもとめているが、それもいわれのないことではないだろう。

仮に荒唐無稽な「ばか話」であるとしても、だがしかし、ルキアノスの『本当の話』は地球以外の世界の住人をえがいた最初の文学作品であり、そこには哲学的思惟とは位相をことにする豊かな想像力がみちみちている。たとえば、ルキアノスえがく月世界の人間（月人）は、女からではなく男から生まれる。

というのは、ここでは結婚するのは男同士だからである。女という性はかれらには未知のものであって、だから当然、女にあたる言葉もかれらは持ちあわせていない。この点についてのかれらのやり方は、次のようなものである。月人はだれもが二十五歳までに結婚し、それ以降になれば自分自身と結婚する。赤ん坊は、女のように胎内にではなく、ふくらはぎに宿す。妊娠した月人のふくらはぎは、すぐに膨らみはじめる。しばらくすると、その腫瘍状のふくらはぎは切りおとされ、子どもが死んだ状態で取りだされるが、その子どもは口を開けたまま戸外へ連れていかれるとすぐに、息を吹きかえすのだ。[21]

奇妙きてれつな妊娠と出産の形態であるが、ルキアノスの想像力の噴出はこの程度ではおさまらない。月には「樹人」(Dendriti) と呼ばれる、もっと奇妙な生殖をおこなう人間がいるというのである。

ある男の右の睾丸を切りとって、地中に埋めておくとしよう。するとそこからだんだん、男根のかたちをした巨大な肉の樹が生えてくる。この樹には枝も葉もあり、亀頭のかたちをした、やたらと長い実がなる。時がみちればこの実が落ち、殻がはじけて中から人間が飛びだしてくるのだ。この樹人たちにはしかし、生まれつき陰茎がなく、そのため人工の陰茎をつけなければならない。本物の陰茎とくらべて遜色ないものが求められるが、金持ちは象牙の陰茎を作らせ、貧乏人は木製のものでがまんするのである。[22]

もちろん、奇妙なのは生殖の形態だけではない。死の形態もわれわれとは異なり、月人（Selenit）は年をとると煙のように空中に溶けだしていく、という。食事にかんしては、全員が蛙を食すのだが、これもわれわれのように食べるのではなく、焼いた蛙から立ちのぼる煙を吸いこむだけである。さらに飲み物も、空気を圧縮して露状にしたものを飲むため、月人は排泄の必要がない。美的感覚も異なっていて、美男子とされるのは禿頭の男であり、豊かな巻き毛は嫌悪の対象となる。身体のつくりも独特である。膝の上部に髭をたくわえ、足には爪も指もなく、あまつさえ尻には青々とした大きな――尻尾ならぬ――キャベツが生えている。だがなによりも特徴的なのは、その眼であろう。月人の眼は取りはずしが自在にできるため、普段ははずしておき、なにか見たいものがあるときだけ、はめ込むのである。

「これらもろもろの世界が、必然的に、ただ一つの形状をもって生成したのではないと信ずべきであり、しかしまた、任意にどんな形状でもとって、生成したのでもない、と信ずべきである」とエピクロスは言い、ルクレティウスは「宇宙の他の場所において、他にも大地があり／様々な人類、獣の種族があると認めなくてはならない」と言った。それを踏襲するかのように、ルキアノスのえがく月世界の住人は、飲食・結婚・生殖・死といった生のいとなみをする点、あるいはまた、髪の毛の生えた頭部・足・膝・尻・眼といった身体の部位をもつ点において、基本的にその生と身体の「形状」をわれわれと共有しつつ、しかしその個々の形態においては、価値の逆転もふくめて、（地球の）人類とは大きく異なっている。ルキアノスだけではない。彼以降、地球以外の星に知的生命体の存在を想定する作家たちは、『月の男』（一六三八）のフランシス・ゴドウィンにしろ、『別世界または日月両世界の諸国諸帝国』（一六五七―六二）のシラノ・ド・ベルジュラックにしろ、異星人の生と身体をえがくにあたって、まずは地球人との同質性を前提としたうえで、異質性をどこまで増幅するかにその想像力を駆使していると言ってよい。「身の丈は八里」すなわち三十九キロ

にして、「まだほんの二百五十歳にもならぬ」小学生のころ、すでにしてその才智の力で「ユークリッドの命題を五十余も解明してしまった」[23] シリウス星人ミクロメガスが地球を訪れたら……という設定で書かれた、ヴォルテールの『ミクロメガス』（一七五二）など、その異質性において、おそらく最大限の振幅を有するものであろう。

かれらだけではない。十九世紀から二十世紀にかけて、SFあるいはサイエンス・フィクションと呼ばれる文学ジャンルが形成されるころになっても、われわれ人類との同質性を前提としつつ異質性を軸にして異星人の世界がえがかれるという構図に、大きな変化はなかった。前述したH・G・ウェルズの『宇宙戦争』（一八九七）においてもこの構図は堅持されていたが、パウル・シェーアバルトの『小惑星物語』（一九一三）にいたっては、そこに登場するパラス星人は、必要に応じて伸縮し望遠鏡や顕微鏡の機能を有するとされる眼によって、（必要に応じてつけたりはずしたりできる眼をもつ）ルキアノスの月人と、千七百数十年の時を隔てて、ほぼ直線的に結びあわされるだろう。ルキアノスに淵源するこの構図が破られるためには、それから約五十年後に出る、スタニスワフ・レムの『ソラリス』（一九六一）を待たねばならない。惑星ソラリスの、「海」の形状をした知性体の出現によってはじめて、われわれとの同質性をほぼ完全に遮断された理性的存在の可能性が呈示されたのである。

見方を変えれば、ルキアノスの『本当の話』は、約千八百年の長きにわたって、世界の複数性ないしETIをテーマとする文学に思考の準拠枠をあたえつづけた。映画『ET』（一九八二）や『インデペンデンス・デイ』（一九九六）の存在まで視野に入れれば、その影響はより広範に、かつレム以降の現在にまでおよぶと言えるかもしれない。だが、ふりかえってみよう。ルキアノスの『本当の話』が書かれたのは一七〇年頃、二世紀の後半である。それにたいして、ルキアノス的発想を思考の準拠枠にもつものとして先に紹介したの

は、ゴドウィンの『月の男』以下、すべて十七世紀以降の作品である。十五世紀間、およそ千五百年ちかくにおよぶこの空白は、なにを意味しているのであろうか。

03—世界の複数性（中世・近代）——クザーヌス、ブルーノ、フォントネル

ひとつには、翻訳の問題があるだろう。ギリシア語で書かれたルキアノスの著作が西ヨーロッパに知られるようになったのは、ジョヴァンニ・アウリスパらによってその写本がイタリアにもたらされた一四二五年頃のことである。一四七〇年代にはラテン語訳が出され、ルネサンス期のイタリアにおけるルキアノスの名声はしだいに高まっていったが、一五〇六年にはエラスムスとトマス・モアという第一級の人文主義者ふたりの手になるラテン語訳がパリで出版され、その名声はアルプス以北にも広がっていく。この共同訳に『本当の話』がふくまれていたかどうか、モアの『ユートピア』との精神史的関連からも気になるところであるが、I・N・オシノフスキーによれば、この翻訳書にはエラスムスの訳した二十九編の対話と、トマス・モアが訳した四編のやはり対話が収められているというから[24]、エラスムスあるいはモアによって『本当の話』が訳された事実はなかったものと思われる。より正確にいえば、すくなくともここでは、その点について確認できない。

ラテン語訳によって復活をとげたルキアノスは、つづいて各国の近代語へと訳されていく。『本当の話』の英訳が出たのは一六三四年のこと。この翻訳はひろく読まれ、後世の著述家にかなりの影響をあたえたといわれるから、当然ゴドウィンの『月の男』（一六三八）への影響がまっさきに想像されるけれども、近年の

研究で『月の男』の執筆年代は一六二〇年代とされているので、この英訳との直接の関連はなさそうである。

ルキアノスの英訳については、それとは別に興味深い報告がある。代々の翻訳者によって『本当の話』に奇妙な省略がおこなわれ、先に引用した、月人と樹人の生殖に関する箇所が削除されてきた、というのだ。「賢明にも、純潔なアングロ＝サクソンの世界をけがらわしい地中海人種の習慣から守ろうとして」[25]のことだと、あるSF史家は揶揄的に言っているが、もしもそれが本当なら、かれら翻訳者たちの行為は、ルキアノス的発想の核心部を理解しないだけでなく、後世がルキアノスにあたえた文学史上の地位を無にしかねないものでもある。というのも、樹人が人工の陰茎をつけるという記述によって、ルキアノスは、惑星間小説を最初に書いた作家としてのみならず、「人工器官とサイボーグについて述べた最初の作家」[26]として位置づけられているからである。奇妙なことに、『本当の話』の日本語への翻訳者である呉茂一もまた、ちくま文庫版『本当の話』（一九八九）ほか数種の版で、いっかんして英訳者と同様の省略をおこなっている。やはり、「純潔な」大和民族の世界を「けがらわしい」ものから守ろうとして、のことだったのであろうか。ちなみに、わたしが依拠している一七八八／八九年のヴィーラントのドイツ語訳には、あらためて言うまでもなく、そのような省略はない。ルキアノスを「長年の文学上の伴侶」[27]としてきたヴィーラントにとって、生殖にまつわる記述を「けがらわしい」という理由で削除することなど、夢想だにできなかったにちがいない。

話をもどそう。右に述べたような翻訳の問題はあった。つまり、ルキアノスは十五世紀まで完全に忘れられていた作家だったのであり、まずは人文主義者たちのラテン語訳によって、つぎに各国の近代語訳によって、十六世紀から十七、十八世紀にかけて徐々に西欧世界に甦ってきたのだった。だがなぜルキアノスは、かくも長きにわたって忘れられていたのだろう。あるいは、こう問いなおしたほうがいいかもしれない。

世界の複数性をテーマにした作品が西洋の文学においてルキアノス以降――すくなくとも知られているかぎり――十七世紀まであらわれなかったのは、ルキアノスが忘れられていたという、ただそれだけの理由からだったのだろうか。

そうではあるまい。ルキアノスとともに、あるいはルキアノスをこえて、じつは、世界の複数性という観念それ自体が忘れられていたのである。なぜか。まずはじめに思いつくのは、三一三年のミラノ勅令でローマ帝国の公認宗教となって以来、ヨーロッパでしだいに巨大な権力をにぎるにいたったキリスト教の存在であろう。世界の複数性――この地球以外に人間もしくは人間に似た知性体の住む世界があるという考えは、このキリスト教の教義と、いかにも折りあいのつきにくい観念であった。

キリスト教の教えによれば、地球は宇宙の不動の中心であり、人間は万物の霊長である。聖書にしるされた言葉を信じるならば、人間は皆アダムとエヴァの子孫であり、動物も草木も、そして星辰すらも、すべてはこの人間のために造られた。そして神は、アダム以後うまれながらに負わされることになった原罪から人間を救済するために、みずからの子イエス・キリストをこの世に遣わしたのである。

どうだろう。このような教義を根本にもつ宗教に、地球以外の星に住む「人間」を想定することが可能だろうか。もしもそのような「人間」がいるとして、かれらはだれが造ったのだろうか。もちろん、万物を創造した神以外にはありえないだろう。だが、どうして聖書には、かれらのことが一言もしるされていないのか。また、かれらはアダムとエヴァの子孫なのだろうか。宇宙飛行をして他の星へ移住したのでもないかぎり、そのようなことは考えられない。だとすれば、かれらの世界には原罪が存在せず、そこで「人間」はイエスの救済を待たずして不死の霊魂をもつことができたのだろうか。あるいは、仮にかれらもアダムとエヴァの子孫だとして、そこには別のアダムとエヴァがいたのだろうか。そして神は、かれらを原罪から救済

するために、かれらのもとに別のイエスを遣わしたのだろうか。そのようにして、この宇宙には、「人間」の住む星の数に匹敵する、ほとんど無数のアダムとエヴァ、ほとんど無数のイエスがいたのだろうか……。

最後の想定など、ライプニッツの可能世界論における、ほとんど無数に存在する可能的世界をひとつの宇宙空間内ですべて現実化したというに近い奇抜な発想であるが、こうした難問に答えを出せないかぎり、キリスト教は世界の複数性という観念を認めることはできないだろう。

キリスト教化された世界においては、世界の複数性という観念は、だからその存在の場所をあたえられなかったにちがいない。すくなくとも、地球を宇宙の中心とするアリストテレス＝プトレマイオス的な有限宇宙観が、ゆるぎない真実として絶対視されているあいだはそうだった。ところが、十三世紀以降、アリストテレスの宇宙観に異議を唱える動きが一部のスコラ学者のあいだから出てくる。『天体論』において「天界は一つであるばかりでなく、多数生ずることの不可能であること」[28]を説くアリストテレスの考えは、神の自由と全能を制限するものだ、という理由をかかげて。「多くの宇宙は現に存在してもいないし、また生成しもしなかったし、これからも生成しえないであろう、むしろ、この宇宙は一つであり、一つしかなく、そして完結しているのである」[29]と断言するアリストテレスにたいし、ボナヴェントゥラ（一二一七頃―一二七四）、ウィリアム・オッカム（一二八五頃―一三四七／九）、ジャン・ビュリダン（一二九五頃―一三五八頃）、ニコル・オレーム（一三二〇頃―一三八二）ら、反アリストテレスのスコラ学者たちは、神の絶対的な力を擁護して、その無限の能力をもってすれば神は無限に多くの宇宙を造りえたはずだ、と主張したのである。世界の複数性の観念に通じるこの考えは、だがこの時点ではまだ、純粋に論理的な可能性のレヴェルで議論されていたにとどまる。それが実在のレヴェルで議論され、地球外知性体の存在がふたたび語られるようになるのは、十五世紀も半ば、ニコラウス・クザーヌス（一四〇一―一四六四）の時代にいたってのことである。

その著『知ある無知』（一四四〇頃）の第二巻第十二章において、地球と他の星辰の居住者を比較して、クザーヌスは言う。

世界のこの場所（地球）は人間や動物や植物の住処（すみか）であるが、これら地球の居住者が、太陽やその他の星々の居住者よりもその階梯において劣っていることを理由に、地球の不完全さを結論づけることはできない。神はすべての星々の領域の中心であり、周辺であって、その神から、相異なった品位をもつさまざまな本性が進み出て、どんな領域にでも住まうのであるが――というのは、天と星々の占めるこれほど多くの場所が空虚になったり、もしかするともっとも劣った星の一つであるかもしれないこの地球にしか生物が住んでいないなどということになったりしないためにであるが――しかしながら、知性的本性（intellectualis natura）にかんするかぎり、この地球およびその領域に住む知性的本性（人類）よりも優れていて、より完全な本性が存在しうるとは思われない。たとえ、他の星々には別の種族の居住者がいるとしても、である。[30]

ここでクザーヌスは「太陽やその他の星々の居住者」の存在について、それがあたかも自明のことであるかのように語っている。奇妙なことではないだろうか。クザーヌスといえば、ドイツ神秘主義の系譜につらなる大思想家であると同時に、教会政治家として東西両教会の合一に尽力し、のちに枢機卿にまで昇りつめた、キリスト教会の大立者である。その彼が、先に述べたように、キリスト教の根本教義に抵触せざるをえない世界の複数性を泰然と説き、そのさい世界創造および原罪との折りあいを問題ともせず、あまつさえ異端の嫌疑をうけた形跡すらないというのは、いったいどういうことなのか。ことの奇妙さは、まさにこの

クザーヌスの影響下、十六世紀に世界の複数性を主張したジョルダーノ・ブルーノ（一五四八―一六〇〇）をおそった苛酷な運命とくらべてみれば、歴然とするだろう。一五七六年、異端審問所からの召喚命令をうけナポリの修道院を脱出したブルーノは、以後十五年間、司直の手をのがれてヨーロッパの諸都市を彷徨するが、ついにヴェネツィアで捕らえられ、八年にわたる幽閉のあと、裸のまま縛られて公開の広場で焚刑に処せられたのである。

十五年におよぶ彷徨の途上で書かれた『無限、宇宙および諸世界について』（一五八四）を読めば、「宇宙は無限の拡がりをもち、世界は無数に存在する」[31]というブルーノの主張が、主としてクザーヌスとルクレティウスに依拠しておこなわれていることがわかる。とりわけクザーヌスについては、対話篇の形式で書かれたこの書でフィロテオ（＝ブルーノの代弁者）の口から「この高尚な人物」「地上に生きた傑出した才能をもった人の一人」という賛辞が呈され、クザーヌスの立ち止まった地点からさらに先に進もうという決意が述べられているし[32]、おなじく宇宙論をテーマに書かれた他の著作のなかでも、やはり「神のごときクザーヌス」という賛辞とともにその思想内容が語られているという[33]。それだけでも、ブルーノがいかに多くをクザーヌスに負っているかがうかがわれるが、はたして、『無限、宇宙および諸世界について』において地球外知性体の存在が問題となり、他世界にもこの世界と同じような居住者が住んでいるのか、と問われたフラカストリオ（＝ブルーノの理解者）は、次のように答えるのである。

> 我々と同様、もしくは我々より上等ではないにしても、劣っていることもないでしょうね。理性的でいくらかでも目覚めている頭脳ならば、この世界と同様ないしそれ以上だとわかっている数しれぬ諸世界に、この世界と同様ないしそれよりすぐれたものが住んでおらぬとは、想像しようがないからで

す。[……] つまり、宇宙の主要成員は無数無限であり、同じような容貌、特権、能力、性質をもっているのです。[34]

地球の人間と他の星々の居住者の優劣を比較するという、クザーヌスの思考の枠組みを継承し、ここでブルーノは、他の星にもわれわれの世界と同じような生物が棲息しているとしたエピクロスの考え、さらにはそれを受け継いで「宇宙の他の場所において、他にも大地があり／様々な人類、獣の種族があると認めなくてはならない」としたルクレティウスの考えをとりいれて、われわれ人類と同等の「人間」がこの宇宙には無数にいることを明言しているのである。

クザーヌスとブルーノ――ともに世界の複数性を主張しながら、ひとりは枢機卿となり、ひとりは異端者として火あぶりの刑に処せられた。このふたりの運命を分けたものは何だったのだろうか。ブルーノの場合、反宗教改革の嵐が吹き荒れる十六世紀という時代背景はあった。宗教改革に対抗するカトリック側の反動攻勢は必然的に異端の取締り強化をともない、一五四二年、ローマにあらたに宗教裁判所が設置されて以来、異端審問はしだいにその苛烈さを増していった。だが、世界の複数性という観念とキリスト教の関係をめぐる状況は、そうした血なまぐさい宗教上の問題とは――すくなくとも当初――無関係に思われたひとつの事件を境に、クザーヌスの時代とブルーノの時代とでは、決定的に異なったものとなっていたのである。コペルニクス（一四七三―一五四三）の『天球回転論』（一五四三）の出版という、科学史ないし精神史上のひとつの事件を境にして。

コペルニクスの『天球回転論』は、いまさらいうまでもなく、天動説から地動説へという天文学上の大転換を告げた書物である。マルティーン・ルター（一四八三―一五四六）がこの書の出版以前に風評で地動説の

話を聞き、いちはやく「この馬鹿者は天文学全体をひっくり返そうとしている。しかし、聖書にあるごとく、ヨシュアが止まれと命じたのは、太陽に対してであって、地球に対してではない」と言ったというが[35]、のちに「コペルニクス革命」と呼ばれることになるこの大転換は、当初より、その理論の聖書との不整合のゆえに、物議をかもしていた。だが、コペルニクスの地動説が、たんに聖書との字句上の不整合にとどまらぬ問題をはらみ、キリスト教神学の喉元に突きつけられた匕首(あいくち)となることがはっきりとわかるのは、ガリレオ・ガリレイ（一五六四―一六四二）が発明されたばかりの望遠鏡を使って天体観測をおこない、その結果を『星界の報告』にまとめる一六一〇年以降のことである。この観測によってガリレオはコペルニクスの説の正しさを確信し、それをカトリック教会にも認めさせるべく精力的な活動を開始したのだった。その後の顚末は、だれもが知っているとおりである。一六一六年、ローマ法王庁は地動説を異端とし、『天球回転論』以下の、地動説を説く一連の書物を禁書目録にくわえた。なおも地動説を擁護するガリレオは、異端審問にかけられ、その後フィレンツェ郊外のアルチェトリの別荘に幽閉された。

そのような歴史の流れのなかに、ブルーノはおかれていた。ブルーノが処刑されるのは一六〇〇年、ガリレオの『星界の報告』以前とはいえ、そして、さらにいえば、彼にかけられた異端嫌疑事項は世界の複数性の主張だけではなかったにせよ[36]、カトリック教会は、コペルニクスの地動説がはらむ危険な起爆力に徐々に気づきはじめていたし、ブルーノの世界複数説がクザーヌスとルクレティウスのみならず、そのコペルニクスにも大きく依拠していることを知っていた。つまり、トーマス・クーンも言うように、「カトリック教会がブルーノのコペルニクス主義を恐れていたのは確か」だった[37]。

すでに、あきらかだろう。クザーヌスの唱えた世界の複数性は、どこまでいっても形而上学的観念にとどまっていた。形而上学的観念であるかぎり、形式上それがいかに異端であったとしても、「人畜無害」[38]

であった。だから教会はやすんじて傍観していられた。しかし、ブルーノの唱えた世界の複数性は、コペルニクスの地動説という近代科学にささえられていた。地動説を認めれば、地球は太陽系の他の惑星とかわらない、たんなる一惑星となってしまう。神が人間に光と時間の区別をあたえるために造ったはずの星辰は地球と同等の存在となり、だとすれば、そこに地球とおなじ「人間」や動物がいたとしても不思議ではない……。この論理のなかで、世界の複数性はもはや観念としてではなく、リアルな存在として語られるものとなる。それと同時に、先に述べた世界創造と原罪との折りあいの問題も、もはや放置しておけない焦眉の問題となるのである。

かくして、カトリック教会は、宗教裁判でブルーノを焚刑に処し、ガリレオには自説を撤回させて、その晩年を寒村に幽閉した。だが、コペルニクスのまいた「革命」の種はそれでついえたわけではない。十七世紀の「科学革命」は、キリスト教権力との軋轢を慎重に回避しながら、ケプラー（一五七一―一六三〇）を経てニュートン（一六四二―一七二八）にまでいたり、アリストテレス自然学の息の根を完全に止めてしまったし、文学・思想の領域では、公然とキリスト教を批判する自由思想家（リベルタン）の著作によって、世界の複数性という考えはひろく流布するにいたる。『別世界または日月両世界の諸国諸帝国』（一六五七―六二）のシラノ・ド・ベルジュラックも、『世界の複数性についての対話』（一六八六）で知られるフォントネルも、そうした自由思想家（リベルタン）のひとりであった。

世界の複数性という考えを広めるのに、とりわけ力のあったのは、フォントネル（一六五七―一七五七）の『世界の複数性についての対話』である。すぐれた科学啓蒙書として、フランス本国だけでなく、各国語に訳されてひろくヨーロッパ中で読まれたこの書物は、すぐれた啓蒙書の常として、なによりも読みやすかった。フォントネルは、この書にひとりの哲学者とひとりの侯爵夫人を登場させ、「われわれが住んでいるこ

の世界がどんな風になっているのか、ほかにも同じような世界があるのか、そしてそこにも人が住んでいるのか」[39]というテーマをめぐって、計五夜にわたる対話をかわさせる。ただし、哲学者はフォントネル自身を思わせる、最新の天文学に通じた人物であるが、侯爵夫人のほうはといえば、理解力にすぐれてはいるけれども、とくに自然学の知識をもっているわけでもない女性、あの「自分がどうしても理解しないわけにはいかないことだけしか理解しない」[40]タイプの女性である。つまりこの書は、コペルニクスの地動説など聞いたこともない女性を哲学者が導いて、彼女の素朴な質問に鋭利な諧謔の精神で答えつつ、世界の複数性という考えをしだいに納得させていく、という段取りになっており、読者は侯爵夫人の立場に身をおいて、フォントネル演じる哲学者の名講義についていけばいいのである。

たとえば第一夜には、「地球は自転し、また太陽の回りを回る惑星であること」が語られる。そこで哲学者は、地球を宇宙の中心においたプトレマイオス（二世紀）の世界体系について、自分の町の港にやってくる船は全部自分のものだと思いこんだという「アテネの狂人」の故事になぞらえて、次のように言う。

> われわれのほうの狂気はというと、それは、自然全体が、例外なく、われわれのためにつくられていると信じ込んでしまうということでして、哲学者たちに、この驚くべき数の恒星が、一体何の役に立っているのか、その一部分だけしかなくっても同じだろうにと問うてみますと、かれらは平然と、それは人間の目を楽しませるのに役立っているのだと答えるのですよ。[41]

こう嘲笑したあとで、哲学者は、このような地球中心的・人間中心的な発想を破壊したコペルニクスの世界体系を侯爵夫人に説明する。そして、その結果、「地球が今は数ある、ただの惑星の一つにすぎな」[42]

くなったことを歓迎するのである。

こうして、コペルニクスの地動説を導入することからはじまったふたりの対話は、第二夜には「月は人の住む地球であること」、つづく第三夜には「月世界の特徴および他の惑星にも人が住んでいること」というふうに、しだいにテーマの核心に近づいていく。この頃には、常識にこり固まった侯爵夫人の頭もかなりほぐれてきて、哲学者にむかって想念上の「惑星旅行」を提案するようにまでなるのだが、「ありとあらゆる違った視点に立って、そこから宇宙を眺めてみましょうよ」[43]というその提案に触発されて、哲学者の想像力は科学的真理をこえた地平に飛翔しはじめる。地球の人間と他の惑星の住人を比較して、哲学者は次のように言うのだ。

たとえば、ここでは声を使いますが、よそでは合図でしか話しませんし、もっと遠くへ行くと、もう全然話をしないでしょう。ここでは推理は完全に経験によって形成されるのですが、よそでは経験は推理の形成に、ほんの少しのものしか付け加えません。またもっと遠くへ行くと、老人も子供と同じように、何ものを知らないのです。ここでは過去よりも未来のことに心を悩ませますが、よそでは未来よりも過去のことに心を悩ます。もっと遠くへ行くと、過去にも未来にもくよくよしませんが、そんな人たちがもっとも不幸だということは、多分ないでしょう。私たちには、自然の第六感が欠けていて、それがあれば、もっと多くのことが知られるだろうといわれます。その第六感は、多分別の世界にはあるのでしょうが、その世界ではまた、私たちが持っている五感のうちのどれかが欠けているでしょう。それどころか、非常に多くの自然的な感覚が、実際あるのでしょうが、私たちは、他の惑星の住人とそれらを分かち合って、結局五つだけもらえたってわけですよ。他の感覚を知らな

いから、結構満足していますがね。私たちの知識には一定の限度があって、人間の精神は、これまでにそれを越えることは決して出来ませんでした。ある一点まで近づくと、突然知識が欠落して、残りは他の世界の住人たちのためということですが、しかし彼らのほうも、私たちの知っている何かは知らないのですよ。私たちのこの惑星では、甘美な恋愛を楽しんでいますが、しかしその多くの部分は、いつも激烈な戦争に荒らされています。別の惑星では永遠の平和を享受していますが、その平和の中で恋愛というものを全く知らず、退屈しています。結局のところ、自然が小規模な形で、人間たちに幸福や才能を分配するためにやっていることを、大規模な形では、諸世界の間でもやったのですよ。そして自然は、すべてのものを多様にするけれども、また埋め合わせをして、差し引きで等しくもするという、あのすばらしい秘訣をよく覚えていて使ったのだろうと思います。[44]

該博な科学的知識をばねにして、フォントネルの想像力は飛翔する。だがこれは、ほんとうに科学啓蒙書の一節だろうか。ここに記されているのは、むしろSFのアイディアを書きとめたメモのごときものではないだろうか。あるいは、地球の人間のあり方を定点として、ありえたかもしれぬ人間の姿をどこまで遠くに投射できるかを競いあう、思考実験のごときものではないか。哲学者と侯爵夫人の対話には、つづく第四夜にも、「全く記憶力を持たず、何ごとについても決して考えたりしないで、ただ行き当たりばったり、つぎつぎ、ばたばた気の変わるままに行動する」[45]水星人や、「非常に冷静で[……]笑うということがどんなことかも知らず、ちょっとした質問でもされると、それに答えるのに、いつも一日はかか」[46]る土星人が登場する。それだけではない。木星には、望遠鏡で地球を発見するがその報告を一笑にふされる天文学者や、地球に「人間」が存在すると主張したため裁判にかけられる哲学者がいるかもしれない、といったことまで

語られている。

『世界の複数性についての対話』は、発行の翌年ローマ法王庁によってただちに禁書処分にされたというが、それも当然であろう。この書は、最新の天文学の成果を伝える科学啓蒙書である[47]と同時に、天文学の成果がひきおこした世界観の転換をつげる哲学書であり、また――木星の天文学者と哲学者の仮構に明瞭にしめされているように――その世界観の転換を阻止しようとするキリスト教会を批判する思想書でもあった。ただ、忘れてならないのは、この書が書かれた十七世紀末においては、世界の複数性の問題、より明確にいえば、地球以外の星にも「人間」が住んでいるのかという問題は、学術誌のレヴェルで議論されるような、学問的にもホットなテーマだった、ということである。だとすれば、存在の有無から一歩すすんで、他の惑星の住人がどのような形姿と行動様式をもっているのかを推測することは、それ自体ただちに非学問的な空想だときめつけられるものではなかっただろう。そしてフォントネルは、このテーマに挑むのに文学的対話形式をもってし、この形式をぞんぶんに利用して、より大胆な推測をおこなう自由をみずからに許したのである。

このような、科学と哲学と思想と文学の領域を横断する言説が――禁書処分にされたにもかかわらず――ヨーロッパ中でひろく読まれたことの意味は、けっして小さくはなかったはずである。ルキアノスやシラノ・ド・ベルジュラックの、あきらかに架空宇宙旅行記とわかる言説とは異なるレヴェルでフォントネルの『世界の複数性についての対話』は読まれ、その結果、地球外知性体の存在可能性はきわめてリアルなものとして、一般に受けとられるようになった。フォントネル以後、十八世紀の哲学者たちは地球外知性体の存在を半ば自明のこととして語りはじめるが、その土壌をつくったのは、おそらくフォントネルだったにちがいない。

04 ニュートンは一匹の猿——カント『天界の一般自然史と理論』

十八世紀の哲学者と呼ぶにはすこし異和感があるけれども、十八世紀の初頭に公刊された『弁神論』（一七一〇）において、地球外知性体の存在を自明のこととして語っているのは、あのライプニッツである。

> 古代の人びとにとっては、人が住めるのはわれらの地球だけであった。[……] 今日では、宇宙にいかなる制限を加えようとあるいは加えまいと、地球の住人に劣らず理性的な住人が住んでいて当然であるような天体——われらの地球と同じ大きさのものもあればそれより大きいものもある——が無数にあるということを認めねばならない。（第十九節）

この認識をささえているのは、やはり天文学の知識である。フォントネルの『世界の複数性についての対話』第四夜においてすでに、「恒星はすべて太陽で、それぞれがその世界を照らしていること」については詳しく述べられているが、そしてそこで侯爵夫人は、もしそれが真実ならば、自分たち地球の人間は、無数に存在する恒星系のなかの・ひとつの恒星系である太陽系の惑星のなかの・ひとつの惑星の住人にしかすぎないことになり、「こんなにたくさんの世界の中では、あなたも、もう私たち人間を、他の世界の住人とはっきり区別して識別することが、ほとんどお出来にならないのでしょう。私のほうは、地球が本当に小さ

く見え始めて、もう何についても熱意がなくなったように思いますわ」[48]と、ため息まじりにもらしてもいるのだが、ライプニッツに右のように言わせているのも、「恒星はみなそれぞれが太陽であり、地球はそれらの太陽の内の一つの附属物でしかないのだから、われらの地球が可視的事物の中でいかにとるにたらぬものであるかは明らかである」（同、第十九節）という認識なのだ。不思議なのは、地球をとるにたらないものとするこの考えが、ライプニッツの可能世界論とどのように折りあいをつけているかである。

この世を最善世界と見なす彼の可能世界論は、われわれ人類の住む地球に適用されたのではなかったのだろうか。地球というこの世界はとるにたらぬものであっても、この宇宙があらゆる可能的宇宙の中で最善の宇宙だとでもいうのだろうか。じじつ、ライプニッツはこの第十九節で、「どの太陽にも幸福な被造物だけが住んでい」る可能性を示唆して、この広大な宇宙に存する善とくらべれば、われわれの世界に見られる悪など無に等しい、などと平然と言い放っている。それが彼の可能世界論を根底から揺るがしかねない考えであるという自覚は、しかしどこにもうかがわれず、この問題をそれ以上追究しようとする気配もない。それだけではない。そもそも世界の複数性を認めるというのは、キリスト教の世界創造と原罪の教えを成立困難にする危険な思想なのだ、ということに思いをはせた形跡すらもないのである。なぜだろう。ジョルダーノ・ブルーノの十六世紀、フォントネルの十七世紀と異なり、十八世紀という時代には、世界の複数性という考えはもはや危険な思想ではなくなってしまったのだろうか。

かならずしもそうではない、ということを教えてくれるのが、十八世紀半ばに書かれた、カント（一七二四―一八〇四）の『天界の一般自然史と理論』（一七五五）である。地球外知性体の存在を語った書物なかで、フォントネル以後もっとも重要な記録となるこの書において、カントはじつに慎重に言葉をえらびながら、自分の考えがキリスト教の教えを冒瀆するものではないことを強調しているのだ。その序文の冒頭、カント

はこう切りだす。

わたしが選んだテーマは、その内的困難さの面からも、宗教との関係を考えてみても、はじめから、かなりの読者にあらずもがなの偏見をいだかせるかもしれない。[49]

ここでいう「テーマ」とは、ただし、第一義的に世界の複数性を指すのではない。『天界の一般自然史と理論』におけるカントの主要な試みは、「自然のもっとも単純な状態から、力学的法則にのみもとづいて、宇宙の成り立ちを説明しようとする」[50]ことにあり、したがって、ここで「宗教との関係」でカントがおそれているのも、まず第一には、ニュートン力学にもとづいて宇宙の生成を論じようとするこの書の基本姿勢が、神の創造の領域にふみこむその不遜さのゆえに、無神論の嫌疑をまねきかねないことであった。たとえば「自由思想家」(Freigeist)であれば、カントの試みが首尾よく成功をおさめたとして、こう言うにちがいない。「目的に向かって進んでいる有用な宇宙の仕組みを、もしも、もっとも普遍的でもっとも単純な自然法則から導きだすことができるのであれば、至高の叡智の支配などとくに必要としないだろう」[51]。そのような無神論的立場と同一視されることをカントはおそれ、みずからの試みを「危険な旅」(eine gefährliche Reise)[52]と呼びもするのだが、しかし、序文において彼が執拗に同一視されることを拒んでいるのは、近代の自由思想家よりもむしろ、古代の原子論者なのである。

あらゆる秩序と美を賦与されたこの宇宙が、もしもただ、その普遍的な運動法則にゆだねられた物質の結果にすぎないのであれば、また、もしも自然力の盲目的な力学がカオスの中からかくも壮大に

自己展開をとげ、そのような完全性におのずと到達するのであれば、[……] 神の支配は不要となり、エピクロスがキリスト教世界のただ中にふたたび甦り、不敬虔な哲学が信仰を足蹴にするであろう。[53]

これは、『天界の一般自然史と理論』を読んだ篤信家がいだくであろう否定的反応をあらかじめ推測した一節であるが、先に自由思想家の発言を想定した場合とほぼおなじ内容の前提部（もしも……なら）と結論部（……であろう）を有する一文において、なぜここにエピクロスの名が、「不敬虔な」哲学者として唐突に呼びだされるのだろうか。この疑問は、だがやがて、序文を読みすすむうちに解けてくる。名前を呼びだされるのは、エピクロスひとりではなかった。レウキッポスやデモクリトス、さらにはルクレティウスといった、すでに本章第二節で世界複数説の精神史的系譜のなかに位置づけられた面々がこぞって名指しされ、かれらの「不敬虔な哲学」とカントの自説との類似が、次のようにあきらかにされるのである。

ルクレティウスの説、あるいは彼の先駆者であるエピクロスやレウキッポス、デモクリトスの説がわたしの説と多くの類似点をもつことを、だからわたしは否定したりはしない。わたしは自然の原初の状態を、かの哲人たちと同様、すべての天体のもとになった素材、かれらの言うところの原子が、空間全体に散らばっていたものと想定する。エピクロスは、それらの元素的粒子を沈下させるものとして重さを想定したが、これは、わたしの採用するニュートンの引力とそれほど異なったものではないように思われる。エピクロスはまた、それら原子に――その原因と結果をかんがみて、辻褄の合わぬ妄想だったとしても――直線的落下運動からの一定の偏倚をあたえたが、この偏倚はわれわれが粒子

の斥力から導入した、直線的沈下からの変移と、ある程度一致している。そして最後に、原子の惑乱運動から生ずる渦という考えは、レウキッポスおよびデモクリトスの説における中枢概念であるが、その渦は、われわれの説においても見いだせるであろう。[54]

カントの宇宙発生論を要約すれば、まずはじめに「空間に散らばって」いる粒子が密度の高い物体に「ニュートンの引力」によって引かれ、つぎに、これによって生ずる粒子の落下が、粒子間に作用するニュートンの「斥力」によって直線運動から側方へ逸れ、その結果「直線的沈下」が沈下の中心点をめぐる循環運動となり、そこに粒子の巨大な「渦」が生じる、というものである。この渦が星雲となって公転運動をひきおこし、規則性のある宇宙が発生したというのが、のちに「カント＝ラプラス説」と呼ばれることになる、彼の有名な星雲説であるが、右のカント自身による説明を読めば、この宇宙発生論が、エピクロス以下の古代原子論者の考えに――「それほど異なったものではない」とか「ある程度一致している」という以上に――大きく依存していることがわかる。ありていに言えば、ここで述べられているカントの説は、古代原子論にニュートンの引力と斥力を接ぎ木したものと見なして、さしつかえないだろう。にもかかわらず、いや、それだからこそ、カントはなんとしても古代原子論者と同一視される事態を避けねばならなかった。いうまでもなく、それが「古代においてまさに神を否定した理論」[55]だったからである。

じじつ、カントは序文の後続部において、原子の運動の偶然性に依拠する古代原子論に、必然的法則に依拠するみずからの説を対置し、そのような必然性にもとづく完全性を統括しうるのは神のみであるという論法によって、神の存在を主張する。だが、このいかにも取ってつけたような論理の背後には、キリスト教会との軋轢を避けることを最優先しているかのような気配が感じられると言えば、うがちすぎだろうか。

いや、ここでカントの宗教観について論じるつもりはない。ただ、これまで見てきたように、レウキッポスとデモクリトスからエピクロスを経てルクレティウスにいたる古代原子論の流れは、その宇宙発生論の論理的帰結として、常に世界複数説をともなっていた。十六世紀に世界の複数性を説いたジョルダーノ・ブルーノの場合にも、ルクレティウスを介した古代原子論の復活が見られ、それがコペルニクスの地動説と結びつくことによって、弾圧の対象にされたのだった。だとすれば、『天界の一般自然史と理論』においておなじく古代原子論に依拠しつつ宇宙の生成を語るカントが、その第三部で世界の複数性について正面から論じるまえに、あらかじめエピクロス以下の原子論者との根本的ちがいを確認しておかなければならなかったとしても、いわれのないことではないだろう。

さて、このような配慮のうえに、カントはいよいよ第三部「星辰の住人について」において地球外知性体の存在を語りはじめるのであるが、しかし、ここでも彼はいぜんとして慎重な姿勢をくずさない。第三部の冒頭、カントはまず、このようなテーマを哲学であつかう場合には「かってきままな機知の放埒」(freie Ausschweifungen des Witzes) は許されない、と断言する。テーマがテーマだけに、確実な事実にのみもとづいて論証することはできないにしても、それでも「虚構の自由」を無制限に認めたり、「遠い宇宙の住人がどのような存在であるかを判断するにさいして、画家がまだ発見されていない国の植物や動物を描くときよりもずっと大きな自由を、想像力にあたえることができる」[56] などと思ってはならない、と。いっけん、このテーマを論じるさいの一般的な心がまえを述べているだけのように見えるけれども、どうだろう、このときカントは、そのような「虚構の自由」をぞんぶんに利用してかつて「星辰の住人について」論じたひとりの「哲学者」のことを、念頭においていなかっただろうか。というのも、その後ほどなく、カントはフォントネルのテクストを引用し、そこで彼を「科学の世界のありきたりの情報を述べたてて、すべての天体に住人

がいないはずがないという空想をおもしろおかしく表明するすべを心得ていた、ハーグ出身のあの機知の人」[57]と呼んでいるからである。すでに紹介したように、たしかにフォントネルはそういう「機知の人」(wiziger Kopf)であり、対話体の文学形式を使って「かってきままな機知の放埒」と見なされかねない本を書いた。その結果、フォントネルの本は禁書処分にされたのだが、いまおなじテーマを純粋哲学の立場から論じようとするカントは——序文で古代原子論者とのちがいを強調したように——ここでもフォントネルとのあいだに明確な一線を引こうとしているように見える。

ところが、である。そうして「機知の放埒」と「虚構の自由」を斥けたはずのカントが第三部で呈示する、地球外知性体についてのテーゼとは、次のようなものなのだ。

> 思惟する存在の卓越性、かれらの観念のかろやかさ、かれらが外界の印象から構成する概念の明確さと的確さ、くわえてそれらを統括する能力、さらにはまたそうした能力をじっさいに行使するさいの機敏さ——要するに、かれら思惟する存在が有する完全性の総量は、一定の規則の支配下にある。すなわち、かれら思惟する存在は、その居住する惑星の太陽からの距離に比例して、しだいに優秀になり、より完全になっていくのである。[58]

つまり、カントは、太陽系の他の惑星に理性をもった住人(=「思惟する存在」die denkende Natur)がいることを自明の前提としたうえで、ここでそれぞれの惑星の住人の精神的能力は「太陽からの距離に比例して」高くなる、だから、水星人や金星人よりも地球人のほうが優秀で、地球人よりも木星人や土星人のほうがさらに優秀だ、と言うのである。軽妙洒脱なフォントネルの各惑星人の特性描写と比べて、法則めいたも

のに準拠したなにやら重々しい議論ではあるが、現代のわたしたちから見て、やはり「機知の放埒」としか思えない奇妙なテーゼではないだろうか。それに、じつはフォントネルの場合にも、厳密にテーゼ化されてはいないけれども、太陽からの距離にもとづく各惑星人の特徴づけはあった。たとえば、金星は地球より太陽に近く、したがってより熱い光を受けているから、その風土は恋愛に適している[59]とか、太陽にもっとも近い水星人は「活発」で、太陽から一番遠い土星人は「冷静」で「のろい」[60]、といった話である。そのような話をもしも「機知の放埒」と呼ぶのであれば、カントのテーゼもそう呼ばれてしかるべきではあるまいか。

さらにつけくわえておけば、『天界の一般自然史と理論』のなかでカントが「機知の放埒」に陥っていると思われるのは、このテーゼだけではない。一例をあげれば、「土星の環の起源」について論じた第二部第五章で、カントは、かつては地球にも土星のように環（Ring）があったと考えられる可能性を呈示し、この可能性を想像力でふくらませて次のように言う。「そのような考えは、みごとな説明と結論をいくらでも引きだせる、なんとすばらしい宝庫をわれわれにあたえてくれることか！　地球の環！　楽園としての地球に住むべく造られた人びとにとって、それはなんという美しい光景であったことか！　ありあまる自然の祝福を受けるべく定められた人びとにとって、それはなんと心地よいものであったことか！」[61]。このように、世界創造後まもない原初の地球に思いをはせたカントは、はずみのついた想像力をさらに飛翔させて、ノアの洪水をひきおこしたのはこの地球の環ではなかったか、とまで言う。地球の環は水蒸気でできていた。地球が環のもつ「そのような美しさにふさわしくなくなった」とき、環に彗星が接近し、その引力で環の運動が攪乱されたか、あるいは彗星との接触で冷却した水蒸気の粒子が凝縮したかして、大量の水が発生した。それがおそろしい豪雨となって地上に降りそそいだのがノアの洪水である、と[62]。

『天界の一般自然史と理論』の魅力のひとつとして、「想像力の奔放なまでの飛翔」をあげる浜田義文は、ここでカントはそれが「機知の放埒」であることを承知しつつ、「いわばそれとアイロニカルに戯れているのである」と言う[63]。たしかに、ノアの洪水にかんする叙述には、地球の環という仮説をみずから「機知の放埒」と呼ぶカント自身の言葉が見られる。しかし、そこでカントが言っているのは、この仮説をノアの洪水の説明に利用することによって「その機知の放埒に重みがあたえられれば」[64]、人びとはそのことで（ノアの洪水という）啓示の栄誉が汚されると思うのではなく、かえって啓示が真実であることの立証となると思うであろう、ということなのである。つまり、地球の環という仮説を「機知の放埒」と呼びながら、ここでカントは、ぞんがい真剣にみずからの仮説を論じているように思われるのだ。

太陽からの距離に比例して惑星の住人の精神的能力は高くなるという、あの第三部のテーゼにしても、カントはそれを「機知の放埒」のなせるわざとして、「アイロニカルに戯れ」る対象として扱っているのではけっしてない。あのテーゼはただの思いつきではなく、「考える能力と物質の運動」あるいは「理性的精神と身体」の関係をめぐる、彼なりの綿密な考察にささえられて出てきたものなのだ。たとえそこに、やはり現代のわたしたちには理解しがたい奇異な仮説がふくまれているとしても。

精神と身体の相関関係について、カントは人間の場合を例にあげ、次のように考える。両者のあいだには無限の距離があるにもかかわらず、精神は身体を構成している物質の性状に「完全に依存している」。なぜなら、人間は「そのすべての概念と観念を、宇宙が身体を介してその魂のうちに呼びおこす印象から得ている」からである（傍点は原文隔字体）。「概念と観念」（Begriffe und Vorstellungen）が「印象」（Eindrücke）から形成され、その「印象」が「身体」（Körper）を介して生みだされる以上、概念や観念の「明確さ」にしろ、それらを結びあわせたり比較したりする力量にしろ、総じて人間の「思考能力」と呼ばれるものは、身体ぬきで

成立しえないだけでなく、身体の性能に根本的に規定されることになる[65]。したがって、

> 人間の身体が発達する度合いに応じて、思惟する存在としての人間の能力もそれに見合った完全性を獲得する。身体諸器官の繊維がその強度と耐久性において完成段階に達したとき、そのときはじめて人間の思考能力は、しっかりとした男性的能力に到達するのである。[66]

よく知られたカントの女性蔑視をうかがわせる一節でもあるが、それはともかく、このように緊密な心身関係が確認されたのち、カントの思いは人間の思考能力のあまりの貧しさへと向かう。人間における「抽象的な概念を結びあわせる能力、認識を自由に使いこなして情熱に流される傾向を抑制する能力」は、きわめて低い。人によっては生涯そのような能力と無縁であり、そうでなくても多くの人びとが、この思考能力の低さのために、たえず迷妄と悪徳に陥る危険にさらされているが、その原因は、カントによれば、人間の身体を構成している「物質の粗雑さ」「繊維の硬直」「体液の停滞と不活発」にある。つまり、人間の思考能力の劣悪さはひとえにその身体を形づくっている素材の劣悪さに起因していると、カントは言うのである[67]。

では、その身体素材の劣悪さは、何に起因しているのか――地球の、太陽からの距離である。素材となる物質の性状は、太陽から放射される光熱の量に多大な影響をうける。太陽から離れれば離れるほど、素材となる物質はわずかな熱量で反応せねばならず、したがってその性状は「かろやか」(leicht) で「敏捷」(flüchtig) でなければならない。逆に、太陽に近づけば近づくほど、素材となる物質は大きな熱量に耐えねばならず、したがってその性状は鈍重で粗雑になるのである。このことを、カントはくりかえし強調する。「さまざまな惑星の住人、いやそれどころかそれぞれの惑星に棲息する動物や植物をもふくめて、かれらを

形成している素材は、総じて、太陽から離れる距離に比例して、よりかろやか、より繊細でなければならず、また、繊維のしなやかさは［……］より完全でなければならない」[68]。

以上のような考察にささえられて、カントは、はじめに呈示したテーゼへとたどりつくのである。惑星の住人の精神的能力が、人間と同様、身体を形成する素材に大きく依存しているとすれば、そしてまた、その素材が太陽からの距離に比例してしだいにかろやかで繊細で敏捷になり、その性質の優秀さと完全性の度合いを高めていくのであれば、惑星の住人の精神的能力は太陽からの距離に比例して高くなり、完全なものとなるだろう、と。

このいっけん明快な論理の、しかしだれの目にもあきらかないかがわしさを指摘することが、ここでの目的なのではない。これまでながながとカントの論理につきあってきたのは、ほかでもない、この奇妙な論理が切りひらく新たな地平にどのような風景が立ちあらわれてくるのか、それを最後まで確認しておきたかったからである。そしてそれは、テクストのうえでは、はじめに呈示したテーゼの直後に、「さまざまな惑星の住人の特性を比較することから生まれてくる愉快な推測」として、そのような推測へと導いてくれる「開かれた広野」（ein offenes Feld）の形象のなかに、立ちあらわれてくる。

存在の梯子のなかで、いわばちょうど真ん中に位置している地球人は、みずからが完全性の両極のあいだにあって、両端から等距離の場所にいるのが見える。木星や土星に住んでいる理性的存在が最上の階級に属しているという思いが、かれらの嫉妬をかきたて、かれらに自身の地位の低さを思い知らせて屈辱感を味わわせるときには、金星や水星の住人が存在の梯子の下のほうで、地球人の完全性のずっと下方でうらぶれて佇んでいる光景を見せることによって、かれらをふたたび満足させ、気持ち

を落ちつかせることができる。それはなんという驚くべき光景であろうか！　一方の極に見えるのは、グリーンランド人やホッテントットですらそのなかに入ればニュートンと見なされるであろう、思惟する存在の群れであり、もう一方の極に見えるのは、ニュートンを見て一匹の猿のなしえたことに驚嘆する、思惟する存在の群れなのである。[69]

これが、あの最初のテーゼの論理的帰結である。まさに「なんという驚くべき光景」であろうか。カントはここで、その起源をプラトンにまでさかのぼる、あの「存在の梯子」(Leiter der Wesen) ないし〈存在の連鎖〉の観念を呼びおこし、その適用範囲を、地球という閉ざされた世界から、開かれた宇宙空間へと大きく拡張する。(壮大な宇宙空間にかけられた巨大な梯子を想像してみよう。) そのうえで、太陽系における惑星間のヒエラルヒーを――太陽からの距離によって――決定し、地球をその中間地点におくのだ。その結果、どのような光景が展望されることになったか。かつて万物の霊長といわれ、地球上の被造物からなる「存在の梯子」の頂点に立っていた人間は、このあらたなヒエラルヒーのなかでは、たかだか梯子の「真ん中」あたりに足をかけ、そこから木星や土星の「理性的存在」を遠く仰ぎ見る存在となりはてる。そのとき、カントが最大の敬意を表する地球の知性体「ニュートン」ですら、かれら高度に発達した知性体から見れば、かしこい「一匹の猿」と見なされてしまうのである。

ふりかえってみよう。これまで世界の複数性を主張してきた人びとは、エピクロス以降、基本的に、他の惑星にはわれわれ人類と同等の理性的存在者がいるものと想定してきた。無数の世界のそれぞれを形成しているのは同じ原子であり、したがってそこにはわれわれの世界とおなじような生物が棲息しているだろうと考えた古代原子論者はいうまでもなく、クザーヌスは、地球以外の星に人類よりすぐれた「より完全な本性

が存在しうるとは思われない」と言っていたし、ブルーノもまた、他の惑星の住人は「同じような容貌、特権、能力、性質をもっている」と考えていた。だがじつは、コペルニクスの地動説以後、宇宙における人類のそのように安定した地位は、すでにゆらぎはじめていたのである。アリストテレス＝プトレマイオス的宇宙観のなかで宇宙の中心に位置していた地球が、コペルニクスの太陽中心説によって数ある惑星のひとつに格下げされたとき、人類はみずからの存在を「大海の一滴」（ein Tropfen im Ozean）[70]のごときものと感じなかっただろうか。その後さらに無数の恒星系が発見され、太陽ですら無数に存在する恒星のひとつにすぎないことが明らかになったとき、フォントネルの侯爵夫人は、世界の想像を絶した多数性を前にして「地球が本当に小さく見え始めて、もう何についても熱意がなくなったように」思い、ライプニッツは『弁神論』において「われらの地球が可視的事物の中でいかにとるにたらぬものであるかは明らかである」と言った。このように、コペルニクス以後、宇宙における地球と人類の地位は下がりつづけていた。

そのような状況のなか、十八世紀において〈存在の連鎖〉の観念が大きく浮上してくる。世界に存在するすべてのものを、最下位のとるにたらぬものから最上位のもっともすぐれたものへといたるひとつのヒエラルヒーのなかに位置づけ、それらすべての存在者が無数の階梯（梯子）をなして連続的にすきまなくつながっているとするこの観念は、アーサー・O・ラヴジョイによれば、プラトンの充満の原理とアリストテレスの連続の原理に発し、新プラトン主義者による体系化を経たのち、十八世紀にいたって突然、流行現象のように広範に受けいれられるようになったものだという[71]。じっさい、ニュートンが一匹の猿と見なされるという、右に引用したカントの一文も、じつはカントのオリジナルな発想ではなく、カント自身によってその直後に引用されている、アレグザンダー・ポープの書簡詩『人間論』（一七三三―三四）に由来するものである。

ごく最近、上位の存在者は見た、
先頃、まさしく驚くべきことに
ひとりの人間が何を為したかを、
どうやって自然の法則を解いてみせたかを。かれらは驚いた、
地球の人間によって、そのようなことが為されうることに、
そしてわれらがニュートンを見つめた、わたしたちが一匹の猿を見るように。[72]（傍点は原文隔字体）

ポープの『人間論』からの引用は、第三部の末尾近くにも見られる。「何という連鎖であろうか、それは神にはじまり」[73]という言葉ではじまるその詩行も、存在の連鎖に深くかかわるものであるが、この書簡詩からの引用は本文中だけにとどまらない。『天界の一般自然史と理論』には、第一部から第三部までの各部の扉にモットーが掲げられているのだが、これが、第一部の「あの大いなる驚異の連鎖を見よ［……］」にはじまって、ことごとくポープの『人間論』から引かれた詩行なのである。カントがいかにポープの唱える存在の連鎖の観念を意識していたかが、それによってもうかがわれるけれども、この観念は当時なにもポープだけに帰せられるものではなかった。

ポープの『人間論』は、彼の友人ボリンブルック卿に宛てて書かれたいわゆる書簡詩であるが、そのボリンブルックもまた、おそくとも一七四四年までに書かれたと推定される『エッセイの断片と覚書』において、人間はたしかに地球ではもっとも知的な存在だが、宇宙に存在する「無数の世界」（numberless worlds）のなかには人間よりもはるかに知的な存在がいて、存在の連鎖の上位に位置しているだろう、という意味のことを

述べている[74]。つまり、ポープはボリンブルックもまたこの観念を共有していることをあらかじめ知っていて、そのうえで存在の連鎖をたたえる哲学詩を彼に書き送ったものと思われる。十八世紀というこの時代、存在の連鎖という観念がこのように広範に流布することによって、世界の複数性という観念にも、どうやら大きな転回が起こったようなのだ。

それまでのように、宇宙には無数の世界があって、それぞれの世界に人間とほぼ同等の知性体が住んでいる、というのではない。存在の連鎖というもうひとつの観念と出会い、これと融合することによって、世界の複数性という観念は、その世界認識の構図を大きく変化させた。宇宙に存在する無数の世界は、もはやわれわれの世界とは無縁に個々独立して存在するのではなく、いわば宇宙全体を包みこむひとつの柵に囲いこまれ、個々の世界がそれぞれ「存在の梯子」のしかるべき場所に位置づけられて、宇宙規模に拡大された存在の連鎖のヒエラルヒーのなかに組みこまれてしまうのである。その結果、なにが起こったか。

その答えを求めるまえに、ひとつだけ確認しておきたいことがある。十八世紀における存在の連鎖のあり方が問題になるとき、注目されるのはふつう、いま述べた存在の連鎖の宇宙規模への空間的拡大ではなく、「存在の連鎖の時間化」だ、ということである。

05 ―存在の連鎖の時間化――メルシエ『紀元二四四〇年』

存在の連鎖という観念は、がんらい静的なものであった。あらゆる存在者ないし被造物が「存在の梯子」という無数に区分けされた階層に配列され、ひとつの静止した世界をかたちづくっていた。「梯子」とはいいながらその階梯を上下に移動することは考えられず、「太陽の下に新しいものはな

にもない」という言葉とともに、永遠につづく不動の秩序を表象していた。ところが、十八世紀に入って、その無時間的な秩序に大きな変動が起こる。ラヴジョイによれば、

> 十八世紀の思想における主要な出来事のひとつは、存在の連鎖の時間化であった。種の充満（plenum formarum）は、人によっては自然の財産目録ではなく、宇宙の歴史のなかで徐々にきわめて緩慢に遂行される、自然の計画であると考えられるようになった。すべての可能的なものは現実化されることを要求するが、いちどに要求がかなえられるわけではない。いくつかのものは過去に現実化され、その後また消滅したように見えるし、可能的なものの多くはいま存在している被造物のなかで実現されているが、それよりも無限に多くのものが、うたがいもなく、きたるべき未来に現実存在となるべく定められている。充満の原理があてはまるのは、永遠の時間のなかに置かれた宇宙においてだけである。[75]

充満の原理を文字どおりにとれば、イデア界の複製として造られたこの世界になにひとつ欠けているものはない。観念上可能なものはすべて現実に写しとられたはずであり、それゆえ世界には、美しいもの・善なるものから、醜いもの・悪しきものにいたるまで、あらゆる「種」の被造物がはじめから存在し、それらの被造物の存在で世界は「充満」していることになる。そのような「種の充満」が連続の原理にしたがって一定の秩序のもとに配列されているというのが「存在の連鎖」とよばれるものであったとすれば、そこにはほんらい、時間の契機の入りこむ余地はなかったはずである。ところが、十八世紀になり、あのオプティミスムが出現することによって、この静的な秩序がきしみはじめる。

ライプニッツのオプティミスム（最善世界説）が存在の連鎖の観念と無縁でないことは、すぐにわかるだろう。この世界を最善とし、悪の存在までもこの最善世界を成立させるための不可欠の要素と見なすオプティミスムの考えは――たとえ可能世界論を持ちださなくとも――この世に存在するすべての悪しき被造物を存在の連鎖の下位に位置づけ、それらをもふくめたこの世界を唯一の階層的秩序として固定する、存在の連鎖の観念と容易に結びつく。ところが、このオプティミスムは、これまでもくりかえし述べてきたように、それを文字どおりに解釈すれば、現実の悪に苦しむ人びとにとっては耐えがたい説であった。あるいは、嘲笑すべき説であった。ヴォルテールの反応に代表されるように、〈理性の世紀〉十八世紀にとって、そのまま万人に受容できるようなものではなかった。それとおなじことが、存在の連鎖にも起こったのである。

オプティミスムにおいて十八世紀になにが起こったか、もういちど思いだしてみよう。この世界は神がすべての可能的世界のなかから選んだ最善の世界なのだから、〈いま・ここ〉においてすでに世界の〈完全性〉は保証されている、というのがオプティミスムのもっともふつうの解釈であった。それに対し、この世界はいま現に最善世界としての〈完全性〉を体現しているのではなく、あくまでも、最善世界を志向する〈完成可能性〉をもちあわせているだけなのだ、世界には無限の〈完成可能性〉があるのであり、だから、まだこの世に生じていないものを含めてはじめて、最善世界と呼ぶことができるのだ、という解釈が出てくる。前章では、世界の〈完全性〉を〈完成可能性〉に読みかえるこの解釈を、ドニ・ヴェラスの『セヴァランブ物語』（一六七七―七九）からシュナーベルの『フェルゼンブルク島』（一七三一―四三）を経てメルシエの『紀元二四四〇年』（一七七一）にいたる、ユートピア小説の流れにそくして考察したが、そのさい、両者をつなぐ核概念となったのは時間のファクターであった。時間のファクターを導入してユートピアの生成をこくめいに語った『セヴァランブ物語』から、生成の途上にあるユートピアをリアルタイムでえがいた『フェルゼン

ブルク島』を経て、ユートピアを未来に設定した『紀元二四四〇年』へと向かうその流れは、時間のファクターを導入して世界の概念を拡張し、最善世界の創出を未来の到達目標として設定するオプティミスム解釈の流れとちょうど重なりあう。十八世紀というこの時代に、いわば〈オプティミスムの時間化〉とでも呼びうる事態が生じたのである。

おそらくはそれと連動して、ラヴジョイのいう「存在の連鎖の時間化」(the temporalizing of the Chain of Being)は起こった。ここでも「存在の連鎖の時間化」は、〈完全性〉から〈完成可能性〉への移行としてとらえられている。その考えにしたがえば、「種の充満」は、この世界が造られたとき、はじめから完璧に実現されていたのではない。そのような〈完全性〉としてではなく、じつは〈完成可能性〉として、「宇宙の歴史のなかで徐々にきわめて緩慢に遂行される」ものとしてある。だから、観念上の「可能的なもの」のなかには、すでに現実化されたものもあれば、これからされるものもあるが、しかし、圧倒的に多数の「可能的なもの」はまだ現実化されておらず、「きたるべき未来」に現実存在となる日を待っているのだ……。

このような考え方がユートピア的思惟につながるものであることは、容易に理解できるだろう。ラヴジョイは「すべての可能的なものは現実化されることを要求する」(all the possibles demand realization)と言っている。この言葉はただちに、『第一真理について』(一六八六―八九頃)で述べられたライブニッツの「すべての可能的なものは存在を要求する」(Omne possibile exigit existere)を想起させるが、ハンス・ハインツ・ホルツが「ライブニッツの体系の中心命題」と呼んだこの命題は、神の正義を証明するというその表層の意図をはなれて、彼の可能世界論がユートピア的契機をはらんでいることを証するものであった[76]。このライブニッツの命題が存在の連鎖に適用され、まだ見ぬ「可能的なるもの」の生成へのうごめきが感受されるとき、時間化された「存在の連鎖」は、〈いま・ここ〉にある世界が不完全であること、あらたな「可能的なもの」の参画

によって別様の世界になりうることを示唆するものとなり、その果てに、ユートピア的な「きたるべき未来」を構想する思考を生みだしもするだろう。そのような思考によって書かれた作品のひとつに、ルイ=セバスチャン・メルシエ（一七四〇―一八一四）の『紀元二四四〇年』（一七七一）がある。この作品については、前章でもライブニッツとの関係を軸に、本章のコンテクストでいえば〈オプティミスムの時間化〉の視点から取りあげたが、ここでは「存在の連鎖の時間化」との関連でいくつかのことを述べておきたい。

ユートピア文学史上初の未来ユートピア小説、ないしはユークロニア小説であり、一七七二年に独訳されてからはドイツでも熱狂的に迎えられ、さらにはヴィーラントの『黄金の鏡』（一七七二）にまで霊感をあたえた小説として知られる『紀元二四四〇年』は、その副題「またとない夢」にも示されているように、一七六八年のパリに暮らす主人公が、夢のなかで二四四〇年のパリにタイムスリップしてしまうという設定で書かれている。六百七十二年後のパリは、なにもかもが変わっている。町並みも、政治も、教育も、医学も、司法も、主人公の目から見ると驚異的な進歩をとげ、十八世紀の啓蒙的知識人にとっての理想社会が実現しているのである。たとえば、絶対君主制は廃止され、世襲貴族ももはや存在していない。子どもたちはディドロとダランベールの『百科全書』を初級読本として学んでいるし、かつて特権階級にのみ奉仕していた医学は国民本位の医療体制を確立している。法律も理性と人間愛にもとづいて体系化され、非人間的な刑罰は廃止されている……。こうしたことを主人公は、街角で出会った二十五世紀の「学者先生」の案内でパリの街を歩きながら毎日少しずつ知っていくのだが、その途中「ベッドの枕元にある、いまいましいドアの蝶番（ちょうつがい）がひどい音を立てた」[77]ことが原因で夢を攪乱され、案内役の「学者先生」を見失ってしまう。以後、主人公は、ひとりでさまざまな文化施設を訪ね歩くことになるが、「王立図書館」と「アカデミー・フランセーズ」につづいて訪れたのが、広壮な宮殿と庭園とからなる「王立研究所」であった。

この研究所の正面には、「宇宙の縮図」という文字が掲げられている。そこが自然学の総合的研究をおこなう場所だからであり、じじつその内部には博物館、植物園、光学研究室、数学研究室などが並存しているが、なかでもとりわけ壮大なのは、四翼の棟からなる博物館である。そこには「自然が生みだしたすべての産物が潤沢に集められていた」[78]。それはあらゆる種類の動植物が「存在の階梯」を容易にたどっていけるように整然と展示された博物館で、たとえば第一棟には「ヒマラヤ杉からヤナギハッカまで」が、第二棟には「鷲からハエまで」が、第三棟には「象からコナダニまで」が、第四棟には「鯨からグジョン（鯉科の魚）まで」が、自然の生みだした多様性と序列を誇示するかのように並べられている。そこに示されているのは、いっけん、時間化される以前の旧来の存在の連鎖であるように見えるかもしれない。しかし、十八世紀の存在の連鎖はまだ観念のレヴェルにとどまっており、あらゆる種を連続的に展示できるような実証的事実ではなかったはずである。それが二十五世紀の「王立研究所」では、ひとつの隙間もない存在の連鎖として、人間の目で確認できるまでになっている。ということは、博物館におけるこの展示自体が、「存在の連鎖の時間化」の結果、獲得されたものだと言えるだろう。

> われわれの時代では大変反論を呼び、何人かの哲学者が賢明にも疑いをはさんだ、存在の梯子も、この頃は、明証のお墨付きを受けていた。種がいわば互いに相接し、基礎づけ合っていることが、はっきりと分かるのだった。また、微妙なしかも感知しうる移行、植物から動物へ、動物から人間まで、何一つ中断がないこと、最後に成長、持続、破壊の同一の原因が、それぞれに共通であること、などがはっきり分かるようになっていた。そういう働きの中で、自然は精力的に人間を形成することを目指していたこと、またこの大切な作品を辛抱強く、遠くからさえ入念につくりあげながら、この完成

の最終段階に到達するための試みを幾度も繰り返していたこと、が指摘されていた。その最終段階が、自然に残された最後の努力であるように見える。[79]

十八世紀にはまだその実在性を疑問視する人びとも多かった「存在の梯子」は、どうやらその後、梯子のすべての段を埋めつくし、二十五世紀にいたって「何一つ中断がない」完全な連鎖として認知されたようである。しかし、「存在の連鎖の時間化」はそこで終わるのではない。連鎖の序列のなかで頂点に立つ人間を、「自然」は「形成すること」だけでは満足せず、「この大切な作品」を「完成の最終段階」にまで到達させようとするのだ。いかにしてか。限られた人間の一生をつなぎあわせることによって、である。ひとりの人間が途中までなしとげた仕事を次の人間が引き継ぎ、それをまた次の人間が引き継ぐ。この精神のリレーを、悠久の時間の流れのなかで何世代にもわたって継続することによって、人類は漸進的に「上昇」していく。

一方が始めたことを、他方が完成します。鎖が途切れることは決してありません。一つ一つの環は、隣の環と強く結ばれているのです。そんな具合にして、鎖は、数世紀の広がりの中に続いて行きます。そしてその観念と、相継ぐ労作の鎖が、いつの日か、世界を囲み、包摂するに違いありません。[……]私たちは実験の松明に照らされてのみ前進するのです。私たちの目的は、事物の隠れた運動を知ること、および人間の存在を拡大できるようにする一切の作業を遂行する手段を、人間に与えることによって、人間の支配を広めることにあります。[80]

ここで言われている「鎖」は、存在の連鎖がほんらい意味していた鎖とは微妙にずれている。人間と異な

るなにか別の種が、形態と序列のごくわずかな差異にもとづいて人間とつながっているのではない。そうではなく、ひとつの時代に人間のなしとげた仕事が「環」となって、次の時代の「環」と鎖状に結ばれているのだ。だがそれも、視点を変えて、そのひとつひとつの「環」がその時代時代の人間をあらわしているものと見なせば、ひとつの「環」と結びあわされている次の時代の「環」は、その「存在を拡大」された次世代の人間を表象していると考えられるだろう。そしてそのとき、「数世紀の広がりの中に」のび広がっているのは、永遠に進歩しつづける、完全に時間化された存在の連鎖である。永遠に、ということは、十八世紀から見れば理想社会に見えるこの二十五世紀も、まだ〈完全性〉の状態に達しているのではない、ということでもある。じじつ、かれら二十五世紀人は主人公にむかって、「世にもまれな、あるいは世にも強力な発見を危険なく利用するためには、まだまだ高みに上って行かなければならないが、その高みには、人間の精神はまだ到達していない」[81]と言う。しかし、そのように幾重にも時間化された存在の連鎖をつきつけられ、かつ研究所内で目の当たりにした科学の進歩に驚嘆した主人公は、それでもやはり、この世紀の到達した水準に圧倒されて次のように叫ぶのだった。

> ああ！　ここでは、人間はなんと偉大なのだろう。[……] 私の時代に偉人と呼ばれていた人々たちも、比べてみれば、なんと小さかったことか。[82]

「存在の連鎖の時間化」の果てに成立した二十五世紀の未来ユートピアは、こうして十八世紀の人間に、別のある状況があたえたのとほとんど同質の驚愕をもたらす。「偉人」という普通名詞に、たとえば「ニュートン」という固有名詞を代入してみよう。するとこの驚愕は、存在の連鎖の空間的拡大によって

想定された、カントにおける他の惑星人がもたらした驚愕と、ほぼ一致するだろう。高度に発達した知性をもつ木星や土星の住人からすれば、ニュートンが「一匹の猿」にしか見えなかったように、二十五世紀のパリ市民から見るとき、ニュートンも当然そのひとりにふくまれる十八世紀の「偉人」たちは、やはり「一匹の猿」にしかすぎないのである。

『紀元二四四〇年』ははじめての未来ユートピア小説としてあまりにも有名であるためか、この作品以後、「ユートピアの時間化」が起こったとする説がひろく流布している。その代表的論者ラインハルト・コゼレックによれば、一七七一年のこの時期に未来ユートピア小説が誕生したのは、偶然ではない[83]。一七七〇年はキャプテン・クックがオーストラリア大陸の東海岸を回航した年であり、以後、地球上に未知の空間はなくなってしまった。(これは、十七世紀以来、ドニ・ヴェラスの『セヴァランブ物語』の場合をはじめとして、ユートピア的想像力をかき立ててきた〈未知の南大陸〉が消滅したことを言おうとしているものと思われる。)そのため、それまでの空間ユートピアに取ってかわって、未来ユートピアが出現したのだ……[84]。コゼレックの主張するこの「ユートピアの時間化」は、はたして正しいか。

まず第一に、未来ユートピアが出現した理由を、地球上の未知の空間が消滅したことだけに帰すことができるだろうか。そうした地理上の問題も、むろん、すくなからぬ影響をあたえたにちがいないが、これまで見てきたように、メルシエの未来ユートピアの成立には「存在の連鎖の時間化」も深くかかわっていた。不思議なことに、メルシエの『紀元二四四〇年』を「存在の連鎖の時間化」と関連づけて論じている論者は――すくなくともわたしの知るかぎりでは――見あたらず、思想史ないし精神史との関連でいえば、ほとんどの場合、一般的な進歩思想との関係か、あるいはライブニッツのオプティミスムとの関係が指摘されるにとどまっているのではあるけれど。

第二に、地球上の未知の空間が消滅したからといって、以後、必然的に未来ユートピアが発生することになるだろうか。これにはコゼレックも若干の留保めいたものをつけていて、「それゆえ、どこにもない場所の作者たちは、すでにかなり前から月や星辰に乗りかえたり、地下に潜ったりしてきた」[85]と言っているが、それはあくまで未来ユートピアが出現するまでの当座しのぎにすぎないという程度のあつかいであって、この問題についてそれ以上の論及はない。はたして、地球上の未知の空間と未来以外に、ユートピアの場所はありえないのだろうか。

ユートピアに影響をあたえた十八世紀の変化は、しかし、コゼレックのいう地球上の未知の空間の消滅だけではない。地理上の変化以外にも、進歩思想の普及やオプティミスムの登場といった観念上の変化があり、わけても重要なものとして、これまでくりかえし述べてきた「存在の連鎖」にかんするふたつの大きな変化があった。そのうちのひとつである「存在の連鎖の時間化」は、私見によれば、メルシエの未来ユートピアの成立に大きな影響をあたえている。だとすれば、もうひとつの存在の連鎖の空間的拡大のほうはどうだったのだろう。メルシエの『紀元二四四〇年』とカントの『天界の一般自然史と理論』は、先に確認したように、時間と空間というそれぞれ異なる方向性の彼方で、一方は二十五世紀人、他方は木星人と土星人という、その知性の進化においてほぼ同質の驚愕を十八世紀の人間にあたえるようなユートピア的形象を呈示していた。であれば、「存在の連鎖の時間化」だけでなく、その宇宙規模への空間的拡大もまた、ある種のユートピアの成立になんらかの形でかかわってはいなかったであろうか。

06 惑星ユートピア——ヴィーラント『罪なき人びとの世界の相貌』

前節で取りあげたコゼレックの「ユートピアの時間化」にたいしては、じつは、すでにH＝J・メールの反論がある。メールによれば、一般に現代のサイエンス・フィクションの創見によると思われている、宇宙における地球外知性体の存在やかれらとの遭遇は、すでに十八世紀の文学作品のなかに広範に見られるものである。「十八世紀になって徹底して利用されるようになった、空間への投影のこのあらたな可能性を考えれば」、未知の南大陸の消滅によって空間ユートピアが時間ユートピアに取ってかわられたとするコゼレックの議論は「ほとんど説得力をもたない」[86]。

そうなのだ。十八世紀とは、世界の複数性の観念が最大のリアリティーをおびて深く浸透した時代だった。たとえば、ドイツでは、一七二六年にフォントネルの『世界の複数性についての対話』がゴットシェートによって翻訳され、一七四四年にはドイツではじめての宇宙旅行小説といわれる『飛行船で行く高き世界への高速旅行』がエーバーハルト・C・キンダーマンによって書かれた。それ以前にも、一七二一年から一七三九年にかけて、ブロッケスが宇宙抒情詩を書いていたし、クロップシュトックはヘクサメーターの形式を使って『メシーアス』（一七四八―七三）を書いた。そしてさらにヴィーラント（一七三三―一八一三）は、クロップシュトックの影響下、『事物の本性』（一七五一）と『亡き人への手紙』（一七五三）を、さらには『罪なき人びとの世界の相貌』（一七五五）を残した。フォントネルの翻訳は別にして、いずれも地球外の星辰に理想郷をもとめる、惑星ユートピアをえがいた作品であるが、その代表例として、ここではヴィーラント

（一七三三―一八一三）の『罪なき人びとの世界の相貌』を取りあげよう。カントの『天界の一般自然史と理論』と同年の一七五五年に書かれたこの作品は、断片に終わってはいるものの、この時代の惑星ユートピアのあり方を典型的に指ししめしているように思われるからである。

表題の「罪なき人びと」（unschuldige Menschen）が意味するものは、テクストの冒頭で簡潔にしめされている。

> 創造主の善意にみたされた数千世界のただなかで、ひとつの幸福の星がおだやかな美しさにつつまれて輝いている。その輝きの美しさは、罪なき人びとの楽園として造られたときのままである。そこの住人は、わたしたちが屈してしまったあの誘惑に不屈の意志で耐えとおし、その本性の善良さをしみひとつ付けずに保ちつづけたのだった。至福の人びとの住む、至福の地。それともかれらを、下界の身体をあたえられた天使と呼んだほうがいいだろうか。というのも、かれらの人間としての霊魂は天使の本性に近く、天使と同じようにやはり不死であり、天上の営みと喜びにふさわしい種類のものだったからである。[87]

作品の舞台は、宇宙の彼方の「数千世界」のなかにある「ひとつの幸福の星」（eine glückliche Erde）である。世界の複数性を前提に、ヴィーラントはこの星を舞台にしてひとつのユートピア的な世界を語ろうとするのだが、「星」と訳した言葉がふつう「地球」を意味しているように、この世界は原初の地球に酷似した過去をもっている。人類の祖先が蛇の誘惑に屈してエデンの園を追放されたのとおなじ状況が、かつてかれらの世界にもあり、しかしかれらはその「誘惑」にたえ、神の教えを守りとおした。その結果、かれらはいまも

原初の「楽園」(Paradies)に住みつづけ、その「至福の地」で「幸福」に暮らしている。つまり、「罪なき人びと」とは、おなじ「創造主」によって造られながら、人類とは異なり、原罪を知らないまま生きている「至福の人びと」のことなのだ。ライプニッツの可能世界論を借りて、アダムとエヴァが知恵の木の実を食べなかった可能的世界の現在を想像すれば、わかりやすいかもしれない。そう考えれば、この星は、ありえたかもしれぬもうひとつの「地球」でもあるだろう。

しかし、歴史の原初における分岐がもたらした、その後の差異は大きい。原罪を知らないかれらの世界には、まず第一に悪がない。罪なき人びとは「怒りも妬みも尊大な誇りも」もつことなく、全員が和気あいあいと「たったひとつのおだやかな家族」のように暮らしている[88]。正確にいえば、社会はひとつの家族からではなく、多数の大規模な家族から成り立っており、それぞれの大家族が「家父長」(Stammvater)の指導のもと部族のように結集することで社会の一単位を構成しているのだが、その家父長どうしが祝祭日ごとに集い、親しく交わっているため、社会はまるでひとつの家族でできているかのように平和を保っているのである[89]。

この平和な社会をつつみこんでいる自然も、古典的なユートピアの特質をそなえている。花が咲きみだれる野原と果樹におおわれた丘からは甘い香りが立ちのぼり、一年中春と秋が調和したような季節がつづき、そのなかで命あるものは皆、この「比類ない楽園」に生きる幸福をたたえて「ここちよい音楽」を奏でる。空には鳥の声が響き、動物たちの喜びの声が丘から丘へとこだまし、さらには生命のない事物までが、ここでは魂を吹きこまれていきいきと存在しているかに見えるのだ[90]。

このゆたかな自然につつまれて、この星の人びとは自然と調和した素朴な生活をおくっている。農耕と牧畜を仕事としているが、肉食はせず、動物ともおだやかな共生関係を保っている。菜食ではあるが、身体に

よい簡素な食事と適度な運動のおかげで、きわめて健康である。また、私有財産をもたず、したがって土地の測量をしたこともない[91]。どうやらこの星の生活は、文明の尺度で見るかぎり、あの『フェルゼンブルク島』と同様、十八世紀のヨーロッパ都市生活の水準に達していないようだ。しかし、逆に人間の身体と精神にかんしては、地球人をはるかにしのぐレヴェルに達しているのである。

ゆたかな自然の美しさとかれら自身のおだやかな気質に対応するように、この星の人びとは「高度な身体の完全性」[92]を所有している。かれらの容貌はきわめて美しく、生きているかぎり永遠の若さを保ちつづけ、そして最後には、苦痛のない死を迎える。かれらに最後に訪れるのは「わたしたちが死と呼んでいる、あの残酷な戦い」ではない。最後のときが訪れると、かれらの霊魂は一瞬の明るい光の輝きとともに肉体を離脱し、天使の形姿となってより高い天上界に上昇していくのである。創世記第五章第二四節で「神と共に歩み、神が取られたのでいなくなった」と言われている、あの「エノク」(Henoch) のように。残された人びとは、ある種の悲哀とともに死者の昇天を見守るのであるが、しかし、この「罪なき人びとの世界」においては、人間は日常的に神や天使と交流しているため、悲しみに打ちひしがれるということはない[93]。

健康で、永遠の美貌を保証され、死の苦痛すらもまぬがれた身体の完全性に対応するかのように、かれらの精神もまた、完全に理性の統制下におかれている。地球の人間であれば理性の制御が一番ききにくい「愛」の問題で、ここではもめごとはいっさい起こらない。たとえば、愛らしい女性が、彼女の価値もわからない男によって略奪されたり、好きでもない者どうしがむりやり結婚させられたり、神聖な夫婦愛が何者かの情欲によって汚されたりすることはありえない。なぜなら、かれらはつねに理性にしたがって行動するからである。

この至福の人びとの衝動と興奮は、どのようなものであれ、おだやかで節度をわきまえている。どんな情愛も自然の合図を聞きいれ、また、かれらを導く理性の声にしたがう。ちょうど、まだ幼くて自分で自分を制御できない子どもが、大好きな母親の言うことを聞くように。[94]

その祖先が神の命令に従順にしたがったように、この星の住人たちは「理性」の命令にしたがってみずからの行動を決定する。ただ、その理性のあり方は、「認識を自由に使いこなして情熱に流される傾向を抑制する能力」という、あの知的思考能力に依拠したカント的な理性というよりも、幼児が母親の、あるいは絶対的な神の命令にしたがうときの従順さに依拠する、なかば宗教性をおびた理性であるようだ。そのような理性を有するこの星の人びとがもっとも高度に発達させた精神的能力は――メルシエの二十五世紀人のもつ知的・学問的能力ではなく――芸術にむかう美的能力であった。かれらの仕事である農耕と牧畜は、「神の業」である自然をまぢかに見て、そこにたえずあらたな驚きを見いだす機会をあたえてきた。そのなかで日々、美的認識能力をみがいた人びとは、いつしか「自然の模倣者」としての芸術に、なみはずれた能力を発揮するようになったのである。

話者である「わたし」はこの星で、大理石の岩山がまるごと彫られて柱廊になっているのを見る。そこには子どもの教育に功績のあった母親や先祖たち、あるいはまた、日々の生活に有用なものを発明した人間や、神にめでられた詩人たちの肖像画が飾られていて、人びとは自分の子どもにこの肖像画を見せながら、かれらのような偉い人になるようにと話し聞かせるのである。ところが、その肖像画というのが、まるで当人が生きて呼吸しているように、いまそこでなにかを考えこんでいるように、みごとに描かれていたのである。それを見た「わたし」は、驚きのあまり次のように言う。

かれらは芸術を非常に高度なレヴェルにまで引きあげたので、わたしたちの世界のもっとも偉大な巨匠の作品でさえ、これと比べれば、ただの習作にしかすぎなかった。[95]

こうして、わたしたちは三たび、「一匹の猿」と見なされたニュートンに出会う。いや、今回、猿のあつかいを受けているのは知の人ニュートンではなく、ミケランジェロだかレオナルド・ダ・ヴィンチだかの美の天才であるのだが、卓越した能力をもつユートピア世界の住人から見ると、わたしたちの世界の偉人は「一匹の猿」に等しいという構図はおなじである。それが、メルシエの場合は未来ユートピアの高みから言われていたのにたいし、ここでは、カントが示唆した木星や土星とおなじく、宇宙の彼方にある遠い惑星の高みから言われている。カントは、存在の連鎖を宇宙規模に拡大することによって、高度に発達した知性をもつ惑星人の存在を推測したのだった。ヴィーラントの惑星ユートピアをささえているのも、それとおなじ存在の連鎖の拡大された観念だったのだろうか。

『罪なき人びとの世界の相貌』にえがかれているのは、ただひとつの惑星ユートピアであり、これだけでは右の問いに答えることはできない。しかし、ヴィーラントの他の作品、たとえば『事物の本性』（一七五一）を読めば、彼もまた、存在の連鎖の観念に強くひかれていたことがわかる。『罪なき人びとの世界の相貌』より四年前に書かれたこの教訓詩の序文で、ヴィーラントは次のように言っているのである。

神は無限であり、いっぽうこの世界は限界に満ちているのだから、もっとも完全な世界がたったひとつの実体から成り立っているなどということはありえない。有限の存在に、神のまったき完全性を受

けいれる能力はない。だから、神の完全性がひとつずつ、段階を追って表現され、写しとられているような、多くの、いや無限に多くの存在があるのでなければならない。[96]

「神の完全性がひとつずつ（stückweise）、段階を追って（den Graden nach）表現され、写しとられているような、多くの、いや無限に多くの存在」――そのような存在の集合体のことを、精神史の世界では〈存在の連鎖〉と呼んでいる。F・バウダッハによれば、この一節はヴィーラントの新プラトニズム受容を証するものであるが[97]、存在の連鎖をめぐるヴィーラントの思考は新プラトニズムの受容にとどまらず、さらに宇宙空間へと伸びひろがっていく。

すべての現実存在を内包している最善の世界において不可能なことは、どこにおいても不可能なのであり、北から吹く西風のように、現実には存在しえない、頭脳の紡ぎだしたたんなる妄想なのである。ところでわたしがここで言っている最善の世界とは、むろん、わたしたちが住んでいるこのちっぽけな地球のことでもなければ、地球がそのなかを漂っている太陽系の渦のことでもない。そうではなく、無限に大きくて、そこにはすべての可能的な存在と、すべての可能的な存在の結合体のための空間が十分にあるような、もっとも完全な世界のことである。[98]

「世界」の概念を、地球をこえ、太陽系をもこえて、無限大の宇宙へと拡大し、ここでヴィーラントは、「最善の世界」はそのような無限大の宇宙規模でとらえてはじめて成立するものと見なす。なぜなら、神の完全性に対応する「すべての可能的な存在」は無数に存在するはずであり、それら無数の「可能的な存在」

を収容できないような世界は「もっとも完全な世界」とは言えないであろうから。「ちっぽけな地球」にも、「太陽系の渦」にも、そのための十分な「空間」はない。「すべての可能的なものは現実化されることを要求する」という、あの充満の原理を満たすことができるのは、無限大の宇宙空間だけなのである。

「もっとも完全な世界」をもとめるヴィーラントの思考は、こうして（充満の原理と連続の原理とからなる）存在の連鎖に依拠することによって、無限の宇宙へと飛翔する。ただひとつ、ここで留意しなければならないのは、ヴィーラントが無限の宇宙空間にその収容を予定しているのは「すべての可能的な存在」（alle mögliche Wesen）だけではない、ということである。それにくわえて、「すべての可能的な存在の結合体」（Verknüpfungen derselben）のことも考慮されなければならない。F・バウダッハは、この「すべての可能的な存在の結合体」について、これはライプニッツの可能的世界がひとつの現実世界のなかの「部分世界」（Teilwelt）に転化したものだと言っている[99]。そのとおりであろう。

ライプニッツの可能世界論にしたがえば、世界創造にさいして神はあらゆる可能的世界を吟味し、そのなかで最善のものをひとつだけ選択して現実化したのだった。ところがヴィーラントは、神が選択しなかったものもふくめて、すべての可能的世界を現実化されたものと見なし、現実化された個々の可能的世界を「すべての可能的なものの結合体」と呼ぶのである。そのとき、無数の可能的世界のあいだに優劣の序列があったように――『弁神論』第四一六節で、女神パラスがテオドロスに見せた「運命の宮殿」における「ピラミッド」状のヒエラルヒーを思いおこそう[100]――、個々の「結合体」のあいだにも当然、優劣の序列があるだろう。そして、宇宙空間における「結合体」が、具体的には天体ないし惑星として表象されるなら、個々の「結合体」間の序列とは、とりもなおさず個々の惑星間の序列になるだろう。かつて、この地球上の被造物のあいだのヒエラルヒーを表出するものであった存在の連鎖は、その適用範囲が宇宙規模に拡大され

ることによって、こうして宇宙の惑星間のヒエラルヒーを表出するものとなるのである。

先に本章第三節において、世界の複数性がキリスト教の教義と折りあいのつきにくい観念であることを述べたとき、わたしはその具体例として、無数に存在する他の惑星に無数のアダムとエヴァ、無数のイエスがいた状況を想定し、次のように言った。それは「ライプニッツの可能世界論における、ほとんど無数に存在する可能的世界をひとつの宇宙空間内ですべて現実化したというに近い奇抜な発想である」、と。ヴィーラントはまさにその奇抜な発想にもとづいて、存在の連鎖を宇宙規模へと空間的に拡大したのである。

われわれの住んでいるこの地球が「最善の世界」なのではない、この宇宙には地球よりも存在の連鎖の上位に位置している惑星がいくらでもあるのだという考えから、それらの惑星にはわれわれの想像を絶したすぐれた知性体が住んでいるという考えまでの距離は、ほんの一歩であろう。そのような知性体の存在を、カントは『天界の一般自然史と理論』において、奇妙な物理学的説明を駆使して理論的に証明しようとし、いっぽうヴィーラントは『罪なき人びとの世界の相貌』において、純粋な文学的想像力を駆使して具体的にえがいた。奇しくもおなじ一七五五年に書かれたこのふたつのテクストは、ともに世界の複数性の観念を存在の連鎖の宇宙への拡大と融合させることによって成立し、そこに現代のSFの系譜にもつらなっていく惑星ユートピアの、観念的原型を生みだしたのである。

観念的原型とことわったのは、広義の惑星ユートピアということであれば、十七世紀にすでにゴドウィンの『月の男』（一六三八）があるからである。たしかに、この作品においても、ドミンゴ・ゴンサレスの訪れる月世界はユートピアの条件をかなりの程度みたしている。月人はきわめて長命で、「罪なき人びとの世界」と同様、苦痛のない死を迎えるし、その「本性のうちにある卓越した気質のため、老いも若きも皆あらゆる悪徳を憎悪し、楽園はかくやと思われるほどの愛と平和と友愛のうちに暮らしている」[10] と言われる。

しかしながら作品全体から受ける印象は、上流階級に属する月人の身長は二十八フィート（約八・五メートル）であるとか、首が切りおとされても三月以内にある種の薬草を塗布すれば元どおりになるといった、奇妙きてれつな設定による地球との異質性のほうがユートピア的卓越性よりもはるかにまさっており、「ルキアノスふうのばか話」（シュナーベル）に近いものである。そしてなによりも、そこに登場する月人には、高度に発達した精神的能力がうかがえない。

これがたとえばヴォルテールの『ミクロメガス』（一七五二）になると、そこにははっきりと「完全性の梯子」[102]という観念の影響が見てとれる。シリウス星系の住人ミクロメガスはその身長が八里（約三十九キロ）と、ゴドウィンの月人の身長を哄笑するような巨大な大きさだが、そのミクロメガスとともに地球を訪れる土星人は、身長千トワーズ（一九四九メートル）の、ミクロメガスから見れば「矮人（こびと）」だとされている。つまり、シリウス星人・土星人・地球人のあいだに、まずは身長のレヴェルで存在の連鎖が成り立ち、それ以外にも、もっている感覚の数（地球人は五感）、寿命、そしてもちろん知性のレヴェルにおいて、圧倒的な格差が段階的に見られることが、順次あきらかになるのである。惑星間の住人の精神的能力のちがいという発想が生まれるには、どうやら世界の複数性の観念だけではなく、存在の連鎖の観念がやはり必要なようなのだ。

このふたつの観念の融合によって十八世紀に生みだされた惑星ユートピアの観念的原型は、その後ＳＦと呼ばれることになる文学ジャンルのなかでも生きつづける。Ｈ・Ｇ・ウェルズの『宇宙戦争』（一八九七）にえがかれた火星人による地球侵略が、火星の技術文明が地球のそれをはるかに凌駕しているという前提のもとではじめて可能となることは、あらためて言うまでもないだろう。あまり知られていないことだが、その『宇宙戦争』と同年の一八九七年に、ドイツでもこれとほぼおなじテーマで、ＳＦの先駆的作品と見なしう

る一冊の小説が出版された。「ドイツで最初のSF作家」[103]と称されるクルト・ラスヴィッツ（一八四八―一九一〇）の『両惑星物語』である[104]。『宇宙戦争』と同様、世紀末の火星人フィーバーのさなかに書かれたこの小説は、しかしウェルズの小説以上に存在の連鎖の痕跡をとどめていると言うことができる。というのは、おなじく火星人による地球侵略をテーマにしながら、そこに登場する火星人は、『宇宙戦争』に登場する「タコ」に似た醜悪な怪物とはまったく異なる、地球人とよく似た美しいといっていい形姿の知性体であり、しかもかれらは、すぐれた技術文明を築いているだけでなく、知的にも倫理的にも卓越したレヴェルに到達しているのである。

小説は、ドイツ人の科学者が気球で北極探検にやってきたところからはじまる。当時、北極は未知の極地で、だからこそ探検の対象になるのだが、そこでかれらは火星人の基地を発見するのだ。その直後、かれらは奇妙な重力場にまきこまれ、気球は落下し、気がつくと火星人の基地に保護されている。基地でかれらは丁重な看護をうけるが、すぐに火星人と自分たちの知性のレヴェルのちがいを思いしらされる。火星人と地球人はたがいのコミュニケーションをはかるために相手の言葉の勉強を開始するが、火星人はいとも容易にドイツ語をマスターしてしまうのである。言語能力だけではない。数学と自然科学も「われわれ人類がはるかな理想として思いえがいている高度な段階にまで達していた」[105]。地球人よりはるかに高い知性をもっている火星人は、かれらを「めずらしい動物をじっと見つめるように」[106]観察していたが、かれらを子ども扱いしていることなどおくびにも出さない。自分たちのほうが優れていることを直接見せつけるには、あまりにも賢く、また、あまりにも礼儀正しかったからである。火星人はまた、捕虜どうぜんの地球人の行動の自由を奪うことができない。地球人が「個人的意志ではなく、倫理的意志」から「個人としての自由な自己決定」にもとづいてなにかをしようとするとき、火星人の倫理観はそれを妨げることができないので

ある[107]。

そのようにも知的で倫理的な火星人がなぜ地球を侵略するのかといえば、ここから先はラスヴィッツの帝国主義批判の問題となる。要するに、火星人は（地球でいえば）ヨーロッパ人であり、未開の民族を教化するために地球人（＝植民地の住民）を支配するというような政治的コノテーションがふくまれているのだが、それはひとまずおいておこう。それよりも、ここでは、火星人の高い倫理観がカント哲学にもとづいていることを指摘する声があることを確認しておきたい。R・インナーホーファーによれば、「火星世界を訪れた地球人は、技術革新があらゆる面で進んでいるのに驚く。しかし、火星人の優越はその点にあるのではなく、カントの理想主義にのっとった、かれらの倫理的原則にこそあるのだ」[108]。そのような高い倫理観のゆえに態度に露骨にはあらわさないが、しかし、それでもラスヴィッツの火星人は、その優越性にもとづいて「めずらしい動物をじっと見るように」、もっとも知的な地球人のひとりであるドイツ人の科学者をながめるのである。カントの木星人や土星人が、ニュートンを「一匹の猿」としてながめるように。

『天界の一般自然史と理論』第三部の末尾近く、カントは次のように書いている。

> われわれはこれまで、物理的諸関係を導きの糸にして、かずかずの推測を積みかさねてきた。そのおかげで、理性の信頼の道を踏みはずさずにここまでやってくることができたのだが、これからあえてこの道をはずれて空想の広野へさまよい出ることを、われわれは望むであろうか。根拠づけられた蓋然性が消え、気ままな虚構がはじまるのはどこか、その境界をだれが教えてくれるだろう。宇宙の他の星辰においても罪が支配しているのか、それともそこでは徳のみが君臨しているのか、というような問いに、いったいだれがあえて答えようとするだろうか。[109]

哲学者カントは、この問いをまえにして、「根拠づけられた蓋然性」の世界に踏みとどまる。しかし、この問いに、「気ままな虚構」を武器にして「あえて答えようと」した人びともいた。それが、ヴィーラントをはじめとする十八世紀以降の作家・詩人たちであり、また、ラスヴィッツ以降のSF作家たちであった。かれらは「空想の広野」(das Feld der Phantasie) へとさまよい出て、見たこともない惑星ユートピアを構想したが、それはユートピア文学のあらたな次元を切りひらき、さらには、現代科学としてのSETIを推進する「宇宙論的想像力」にまで、その影響をおよぼすことになったのである。